interlace fate

遠野 桜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｉｎｔｅｒｌａｃｅ　ｆａｔｅ

【Ｎコード】
Ｎ９１８３Ｒ

【作者名】
遠野　桜花

【あらすじ】
交錯する、きっとそれは必然。偶然なんてありえない、それは私達が掴んだ思い……

始まりの鐘が響く　１―１

春の早朝、雪華は目を醒ました。
春眠暁を覚えず、は有名な漢詩の一節だが、早朝の美しさを見ずに寝ていることは雪華にはできなかった。冬を思わせる寒気の中、初々しさを漂わせて朝日が昇る。夏のように親しげに、秋のように淋しげに、冬のように白々しい訳ではない。
桜についた朝露がシャワーの後のような涼しさを感じさせる。全てが初めての輝きを湛えている。そんな美しい春の朝が、雪華は好きだった。
全てが純粋で、無垢で、綺麗な世界が。

雪華は下に降りて、日課のシャワーを浴びることにした。温度調節を冷水にして、ゆっくりと浴びる。水の、身を切るような冷気に浸る。
（このまま、眠ってしまいたい……）
大好きな、この感触。足から力が抜けていくような、少し身体が浮き上がったような感じ。
そして自分が、無機物になっていくようなそんな感触が、大好きだった。実は、この冷水シャワーは姉から凄まじく評判が悪い。このあと姉がシャワーを使う時、床が冷えるというので。しかし、そんな苦情程度で雪華は止める気は毛頭なかった。こうしているのが、一番好きだから。
このまま、いくらでも眠れてしまいそうで――――

だが、いつまでも、それを味わうことはできなかった。中学生である以上、学校に行かなければならなかった。

基本的に雪華は朝食をとらない。食べる気がしないからだ。小さな時は嫌々ながら食べさせられていたが、今は母親も何も言わない。というか起きない。

軽く身繕いをする。雪華は背中にまで達するその銀色の髪に櫛を入れた。

鏡に映る自らの顔を見て、雪華は軽くため息をつく。

なんて、常人離れした姿なのだろう、と。

抜けるような真っ白な肌。深紅の瞳孔。そして、豊かな銀髪。

ふと、友人の怜が、理由もなく少し羨ましく感じた。

軽くため息をついて立ち上がる。手早く冬用制服を身につけると、教科書やノートを入れた学校指定の鞄を肩にかけた。

玄関の鍵を閉めると、ちょうど後ろから人の近づいて来る音がした。振り返ると、クラスメイトの風見怜がいた。付き合いはかなり長く、怜が転校してきた小学三年からの友人だ。

「おはよう、雪華」

「おはよう、怜ちゃん」

なんとも日常的な、当たり障りのない挨拶。そんな中でも、怜は日常の殻を破っても、それを壊さないほどに美しい。どうせ目立つな

ら、怜のようになりたかった。そう、挨拶をしながら考えていた。
怜はらしくもなく考え込んでいる雪華を見て、唐突に吹き出した。
「ど、どうしたの」
何かまずいことでもしたのかとでも考えたのか、雪華が怖ず怖ずと尋ねてくる。
「ううん、何でもない。学校行こ」
「そ、そうだね」
いつもと変わらなかったはずの日常は、少しずつぶれていく。

内包されていた、歪みのために。

二人並んで通学路を歩く。まだ朝が早いせいか、出歩いている人はいない。不意に、怜が雪華の手をとる。怜の意図を察した雪華は手を振り払おうとするが、怜の握力には敵わない。
「や、止めて……」
「あ、今日も？」
怜が言っているのはシャワーのことだ。怜が雪華の手を頬につける。
「雪華の手って、冷たい。それに、とても気持ちいい……」
「や……めて、恥ずかしいよ……」
「離してなんか、あげない」
「……ひどい」
雪華が身もだえする。しかし怜はいっこうに離してくれない。結局、学校に着くまでそのままだった。雪華の顔は真っ赤で、目が伏し目になっていた。
「恥ずかしいよ……」

「雪華、ものすごく可愛い」
「女の子が女の子に、そんなこと言っていいの？」
「可愛いには違いがないもの。これぐらい」
「あっ！」
「止めて……」
気付いたときには、雪華は校庭の真ん中で怜に抱かれていた。
「何故？」
「……恥ずかしいよ」
「誰もいないよ」
「……怜ちゃんの、意地悪」
「ふふっ、雪華って可愛い」
そう言って、怜は手で雪華の髪を梳かす。雪華は恥ずかしさのあまり、首筋まで真っ赤にして怜に抱かれていた。

始まりの鐘が響く　1—2

最終的に雪華は、十分ほどして解放された。頭がくらくらとする。身体が熱い。

全身が、燃えてしまいそうなぐらい——

君島陽菜は正門近くの駐車場に、愛用の軽自動車を止めた。この青京大付属都沢中学校に勤めるようになってから五年。勤続三十年、四十年の教師からすればまだひよっこにしか過ぎないものの、中々今は今で楽しい。

車の後部座席に置いていた鞄を肩に掛けると、陽菜の耳に話し声のようなものが聞こえた。

「……なんだろう？」

万が一、不審者であるなら生徒に被害が及ぶ前に取り押さえなければいけない。陽菜は鞄のストラップを握りしめ、声のする方向に向かった。

声がするのは正門からだ。陽菜は近くの茂みに姿を隠して辺りを伺う。だが、その必要はなかったと苦笑した。声の元は担当しているクラスの生徒達だったからだ。

二人とも特徴的な生徒だから、よく知っている。雪華と怜だ。が、どうして怜が雪華を抱きしめているのだろう。陽菜はそのいきさつ

が気になったが、邪魔はしないでおこう、と自らに誓って戻っていった。

(身体の中が……熱い……どうして……)
いつもなら集中できるはずの授業が、今日は全く集中できない。昼休みになって、雪華は怜に文句を言った。
「なんで……あんなこと、したの」
「雪華が可愛いから」
こう即答されると最早怒る気力すらない。ただ呆然としていると、怜が爆弾発言を放った。
「雪華って可愛いから、守ってあげたいな」
「どうして……」
怜は答えることなく、他の席へ移動していった。

「雪華、一緒に帰ろう?」
終礼が終わり、喧騒に満ちた教室。怜は鞄を肩にかけると、雪華に言った。だが、雪華は少し俯いて、首を横に振った。
「……雪華?」
「ごめん怜、今日は……一人にして……」
今日、雪華は一緒に帰ってくれなかった。

怜は家に帰る道すがら、雪華のことを考えていた。

雪華は何か守ってあげたくなる魅力、とでも言うべきものがあった。自分より頭一つ背の低い雪華は可愛い人形のような印象を与える。長い睫毛と切れ長の目。腰椎に届く程の長い髪。透き通るように白い、冷たい肌。しかし、怜が一番惹かれているのはその瞳だった。色素が薄いのか瞳孔が紅い。それに怜は、何か引き込まれそうな感じを覚えていた。

こんな感覚を感じ取ったのは、何時からだったのだろう。多分、彼女……雪華に初めて会った時からだ。

怜は小学校三年のとき、隣町からここに引っ越して来た。そのとき隣になったのが雪華だった。彼女は最初、あまり話そうとしなかった。昔から一人でいることが多かった彼女に、一躍クラスの人気者になった怜は話しかけづらい相手だったのだろう。転校してから一週間程経ったある日、雪華が筆箱を漁っていた。さすがに見かねた怜は雪華に話しかけた。

「何か忘れたの？」

雪華ははっ、と顔をあげた。その紅い、深い瞳に怜は惹かれた。

「……うん。消しゴム忘れちゃって」

「一つお願い聞いてくれたら、貸してあげるよ？」

「……何？」

「……私と、お友達になってくれない？」

怜はてっきり拒絶されるだろうな、と思っていた。だから返答は意外なものに思えた。

「私で、いいなら……」

「ありがとう」

こうして成り立った友情は、だんだん雪華に対する愛情へと方向を

変えていった。

今すぐにでも抱きしめてあげたい、守ってあげたい、と。

始まりの鐘が響く　1―3

何だか、ものすごく熱っぽかった。
馬鹿の一つ覚えのようにシャワーを浴びて熱自体は収まったが、そこからもたらされた倦怠感は雪華の行動意欲を完全に奪っていた。

今雪華は風呂場から出たまま、バスローブ一枚で自室のベッドに横たわっている。正直言って、なにもかもが面倒だった。
ドアをノックする音がした。半ば無意識に「はい」と返事をする。
「ゆーきーかっ！」
「……どうしたの、絢乃お姉ちゃん」
ハイテンションな突然の闖入者に、雪華は思い切り迷惑げな視線を投げつけた。それに絢乃は別段気にするわけでもなく、雪華の隣に身体を滑り込ませる。雪華から見て四つ年上の絢乃が本来一人用のベッドに入ってくると、どうしても身体をくっつけることになる。それが嫌なのか、雪華はそっぽを向いた。
「雪華、様子変だよ？　告白でもされたの？」
絢乃は冗談のつもりで言った。返ってきたのは、さっきの気怠げな声ではなく、押し殺したような声だった。
「……わかんない。怜ちゃんがね、いきなり……私のこと、抱きしめてきて……」
「え、風見ちゃんが？」
「……うん」
「それで？」
「身体が熱くて……とても、熱くて……私、どうしたらいいのか、わかんなかったの……」
「雪華、こっち向いて？」
「お姉、ちゃん？」

雪華はゆっくりと振り向いた。その瞳は未知への恐怖でいっぱいで、絢乃はその瞳に吸い込まれそうになる。

やっぱり、今も変わらない。

十四年経った今も、昨日のように覚えている、初めて雪華を見た時。

雪華はお人形さんのように可愛くて、私は雪華のお姉さんということが誇りだった。

私も、雪華のこと、大好きだった。だけど、私は雪華には相応しくない。

だけど、力にはなってあげたいと思う。雪華が、私を頼ってくれるなら。

絢乃は雪華を抱き寄せた。いきなりのことに、狼狽する雪華。

「離し、てっ……」

「雪華、風見ちゃんのことは好きなの？」

雪華の抗議を無視して、絢乃は雪華に質問する。雪華の弱々しげな抵抗はすぐに止み、おとなしくなった。

「……友達としてなら、大好き。いつも優しくて、綺麗で……」
「きっと、風見ちゃんは雪華のこと、一人の異性として大好きなんだと思う」
「一人の、異性？」
「そう。私もね、雪華のこと大好きだった。だけど雪華に、私は相応しくない。私は、雪華をまっすぐ見れないから」
「どうして……」
「私が、雪華のお姉ちゃんだから。私じゃ、雪華を妹としてしか見れない。だけど風見ちゃんなら、きっと雪華をまっすぐ、見てくれる。
もし雪華が風見ちゃんのこと好きなら、風見ちゃんを、まっすぐ見てあげて。雪華ならそれができるし、それができれば、ずっと風見ちゃんといられると思うから」
雪華は頷いた。疲れていたからだろう、そのあと雪華は安らかに寝息を立てて眠ってしまった。

眠ってしまった雪華の髪を撫でながら、絢乃は一人、呟いた。
「翔も、そう言ってたもんね。雪華、きっと、大丈夫だから」

始まりの鐘が響く　２―１

翌朝。雪華はゆっくりと目を開けた。
（暖かい……）
あのまま、寝てしまったらしい。絢乃を起こさないようベッドから抜け出し、そっと掛け布団を直す。

いつものように登校の準備をする。玄関を出ると、怜がいた。
「おはよっ、雪華」
「……おはよう」
怜が側にくる。恥ずかしいことをされるとわかっていても、雪華は動けなかった。

否、動かなかった。

「雪華、元気なさそうだけど大丈夫？」
天地がひっくり返るような感覚がしたのも一瞬だけで、気づくと雪華は怜にお姫様抱っこされていた。

抵抗しようと思えばできたはずだった。だけど、何もできなかった。いや、しなかった。

やっぱり、私は怜のことが好きなんだ。雪華はそう思った。

「怜、なんで……こんなこと、するの」
「駄目？　可愛いんだもの」

言葉は、何かを知らせるものではなく、ただ確認するためだけに紡がれる。

「……怜の、いじわる。私が恥ずかしいの、分かんないの？」
「分かるよ。だって、私は雪華のこと大好きだから」
唐突に、雪華は襟を掴んで怜の胸元に顔を埋める。
「……怜はまだ、恋人、いなかったよね」「いないよ。それで？」
「…………本当に、私が好きなら、ここで……私に、はじめてを、頂戴」
「雪華がして欲しいなら、喜んで」
「ありがとう」
怜には意外だった。雪華がそう言うとは思っていなかった。だけど、ものすごく嬉しかった。
「……早く、して。本当に、好きなら」
「うん。雪華、大好きだよ。顔、上げて？」
雪華の小さくて可愛らしい唇が、少しずつ近づいてくる。
「ずっと、一緒にいようね」
そう怜が言うと、雪華は満足げに頷き、瞼を閉じる。

互いの唇が触れる。暖かくて、とても甘くて。いつまでもこの時間が続いて欲しかった。満足するまで唇を求めあって、名残惜しげに唇を離す。

長い儀式は静かに終わりを告げる。二人は儀式の余韻を共有しようとするかのように互いを見つめ合う。

ずっと、このままでいたい。そんな中で、学校を休もうという会話が出るのは至極当然といえた。

「今日、休まない？」

「……うん」

しかし考えてみれば、無断で学校を休むなどということを二人はしたことがなかった。

「こういう時、二人でいられる場所がないのって痛いよね」

「うん……」

「仕方ないか。私の家来ない？」

「……怜の、家に？」

「どうせ誰もいないから」

「そうしよっか」

醒めた口調と裏腹に、雪華の声は熱を帯び、目は熱病にかかったようにとろん、としている。

「一つ質問するよ。降ろしてほしい？」

「ううん、このままでいい。……怜ちゃんと、いたいから」

　両親が出張しているので誰もいなかったが、つい三十分ほど前に出た家は、まだ僅かに温かみを残していた。鞄をリビングに置いて怜の部屋がある二階に上がる。
　学校を休むと言っても、特になにか計画がある訳ではなかった。それなら二人で一緒にいる方が余程愉しい。
「……怜、もう一回、して……」
身体をほんのり桜色に染めて、熱に侵されたような声で雪華が呟く。
「大、好き……だから」
「雪華が望むなら、何度でも」
怜はゆっくりと唇を近付ける。幾度繰り返しても飽きることはなく、むしろ怜が雪華を欲していた。
　雪華をベッドに下ろすと、怜もベッドに入る。向かい合う形で、怜は雪華の細い肩を抱きしめる。

　そうすると、怜は安心感からか急激な睡魔に襲われた。
　雪華が好きになってから、あまり眠ることができなかった。いついなくなってもおかしくないような儚さが、美しいのだけれど怖くて、眠れずにいた。
　でも今、雪華が消えてしまう心配なんてしなくていい。

　だって雪華は、私の腕の中にいるんだから。

　雪華のいる嬉しさに浸りながら、怜は眠りに引き込まれていった。

始まりの鐘が響く　2―2

怜ちゃんって、暖かい。

制服越しに伝わる暖かさに身を委ね、雪華は怜の胸に顔を埋めていた。怜は眠ってしまったのか、規則正しい寝息が聞こえてくる。

もう、何時死んでもいい。怜になら、殺されてもいい。無防備な横顔は、文字通り天使のようで、壊してしまいたい衝動にかられる。

「……私ね、怜のこと、大好き」

雪華は怜の手をほどくと、耳元でそっと言い、耳を軽く噛む。

「……もう、全部怜に、捧げて……あげたい。

ううん……全部、怜に……捧げるの。絶対、に」

雪華の中で、何かが吹っ飛んだ。

迷いをなくした瞳は、どこまでも澄んでいて。

怜を見つめる顔は、慈愛に満ちた聖母の顔を思わせて。

そして、微笑みはあくまで暖かい。

（ずっと、私は怜の側にいるからね……）

怜はふと、目を覚ました。ベッドの中で抱きつきあって寝てしまったため、布団はひどく乱れていた。可愛らしい寝息が、綺麗な銀髪が首を、胸を、腕を、顔をくすぐる。怜は手櫛で乱れた雪華の髪を梳くと、あらわになった頬にキスをする。口の中に、甘酸っぱい雪華の匂いが充満した。ふと、目の前の美しい少女を壊してしまいたい衝動に怜はかられた。

だけど、ここで雪華をめちゃくちゃにしたら、やはり雪華は傷ついてしまうだろう。

だから、目を覚ますまで待っていよう。

いつの間にか寝てしまったらしい。気がつくと怜がいない。

「……れい？」

雪華は身体を起こすと、辺りを見回した。布団は丁寧に直され、まだ暖かみが少し残っている。そのとき、ドアが開く。

「あ、雪華起きたんだ。可愛かったよ、寝顔」

アイスティーを載せたトレイを手に、屈託なげに笑う怜。恥ずかしげに雪華は俯く。

「怜だって……」

「先、見られちゃった？」

「……天使、みたいだった」

「まあ、これでもどうぞ」

怜がグラスを渡す。一口、口をつける。
「ありがと。だけど……苦い」
地悪そうな目で怜は雪華を見る。
「そうだね。なら、こうしてあげる」
「！」
怜はアイスティーを一口含むと、雪華の唇にキスをする。怜の舌が唇をこじ開け、中の液体が雪華の口内に流しこまれる。
「おいしい？」
雪華は頷いた。あれだけ苦かったはずのアイスティーが、まるで魔法のように甘かった。抗えないほどの質感が奔流となって何もかもを押し流しそうな錯覚にとらわれる。

だけど、そんな幸福な時間はすぐ尽きてしまう。
「次は私の番だね、怜」
雪華はベッドから降りて立ち上がると、アイスティーを口に含み、怜の唇に少しずつ流し込む。わざとゆっくり、少しずつ。
怜がアイスティーを求めて舌を伸ばすと雪華は流し入れるのを止め、舌が下がるとまた少しだけ流し込む。
一途に自分を求める怜が愛おしくて、少しでも長く同じ時間を共有したくて、雪華はアイスティーを少しずつ飲ませていく。

飲ませ終えるころには、立っていたはずの怜は力が抜けたように

ベッドに座っていた。

「おいしかった？」

「……うん、とても」

「一つ、聞いていい？」

そう言って雪華は怜をベッドに押し倒す。いきなりのことで抵抗もできず、雪華が怜の上にいる状態になる。

「……雪華？」

始まりの鐘が響く　2―3

顔を赤く染めて雪華は言った。
「怜ちゃんのこと、食べちゃっていい？」
怜を見つめる真摯な瞳は、その言葉が冗談ではないことを示していた。
「うん。雪華なら、全部食べちゃっていいよ。でも……大胆になったね」
「怜ちゃんが悪いんだよ。私に恥ずかしいことするから。……でも、ありがとう」
どちらともなくお互いを抱きしめる。

もっと、怜が欲しい。
もっと、雪華が欲しい。

唇が触れ合う。熱くて甘いなにかが、口の中に入ってくる。お互いがまるで熔けてしまうように熱くて、だけど完全に熔けるには服の衣擦れが邪魔で。
私と怜は謀ったように視線を合わせると、抱き合っていた手を少し解き、むしり取るようにお互いの衣服を脱がせていく。ぷちり、とブラウスのボタンが弾け飛ぶ音がした。全てが曖昧な世界で、その音はとても澄んだ音だった。
溺れていく。沈んでいく。怜の甘い香りが私の全てを満たしていく。
このまま、永遠に怜に囚われてしまいたい――――

抱きしめた雪華の身体は、いつもと違ってひどく熱かった。
「雪華の身体、とても熱い」
そう言うと、雪華は「怜だって……」と熱で浮かれたような声で弱々しげに答えたあと、恥ずかしげに俯いた。
「雪華、顔上げて欲しいな」
「……やだ。恥ずかしいよ……」
怜は雪華の下腹部に右手を滑らせる。雪華は怜の手が自分の局部に当てられたのに気づき、少し身を強張らせる。
「……顔上げてくれないと、雪華の、とっちゃうよ？」
そういうと、雪華は怜の耳元で囁いた。
「怜は、私が……欲しいの？」
「欲しいよ。私のものにしたいぐらい」
雪華の瞳が、少し潤んでいるように見えた。
「……あげる。だけど、痛くしないで」
「ありがと、雪華……」
怜は雪華を抱き寄せる。身を固くしている雪華に、怜は極力落ち着いた声音で話しかける。
「緊張しないで。あまり力みすぎると反対に痛いから」
怜の長い指が、なんの抵抗もなく雪華の中に侵入していく。中の膜状の物質に突き当たったところで、怜は一旦指を止めた。
「雪華」
「……怜？」
「大好き」
あまりに唐突すぎたのか、雪華はあっけにとられていた。その隙を狙って、怜は雪華に口づける。さっきとは違う、まるで雪華を快楽の海に突き落とそうとするかのようなキス。それを雪華は抵抗するでもなく受け入れる。怜から与えられる、限りのない悦楽に沈んでいく。
　何度も何度も、キスを交わす。雪華は耐えられないかのように声を漏らす。

「怜……」
「どうしたの、雪華」
「もう、生殺しは、嫌……」
そう、息絶え絶えに雪華は呟くと、怜に回していた腕を引き寄せる。

セーフティは外され、最早撃鉄はカートリッジの雷管を起爆させんと身構えている。あとは引金を引けば、もうそこには何もなくなる。
それを雪華は自ら引いた。まるで拳銃自殺を試みる士官のように。放たれた弾丸は確かに、雪華の一部を完全に破壊した。
「雪華……？」
破瓜の苦痛が、かなりのものであったことは雪華の声から十分すぎるほどに分かる。なのに雪華の顔は優しく微笑んでいた。
「……ありがとう、怜」
ひどく痛かっただろうに、何も言わない。そんな雪華の態度が、怜にはひどくいじらしく見えた。
「痛かったでしょう？」
怜の問いに、雪華は小さく横に首を振る。
「……痛覚にも、種類があるんだね」
「え？」
「あの時、ものすごく痛かったけれど、私はそれが苦痛じゃなかった。奇妙な言い方だけど、痛みが嬉しかった」
「痛みが……嬉しかった？」
「そう。ずっとこの痛みが続けばいい、って思えた。それぐらい、私は嬉しかった。
私はもう、怜に初めてキスされたときから壊れてしまったのかもしれない。だけど、それでいいの。
私は、怜のことが大好き」

「私も、大好きだよ。ずっと」

始まりの鐘が響く　2―4

　雪華と怜はひとしきり見つめ合うと、雪華は腕を解く。そのとき聞こえた、小さな水音に気づいて雪華が自分の下腹部を見る。そこは破瓜の血がシーツに小さな水溜まりを作っていた。それをみると、雪華は恥じらうような小さな声で言った。

「ごめんね、怜。シーツ、汚しちゃって」

雪華の謝罪に、怜は曖昧に首を振って笑った。

「いいよ、そんなこと。だけど……」

「だけど？」

「雪華の血、とっても綺麗……」

「……怜？」

怜は血で赤く濡れた右手を掲げ、それをうっとりとした目で見る。不意に怜は手を口に近づけると、血を嘗め始めた。

「れ、怜……」

「……美味しいよ、雪華」

程なくして手の血を嘗め尽くした怜は、ゆっくりと雪華の下腹部に顔を埋めていく。ぴちゃぴちゃと、水音がするたびに雪華は羞恥のあまり俯く。抑えようとしても抑えきれない声。それに気付いているのか、怜は少しづつ血を嘗め取っていた。

　一瞬が永遠にも感じられる、恥ずかしくて、だけど甘美な時間。部屋の中は、怜が血を嘗め取る水音と、雪華の漏らす声で満たされる。とても恥ずかしかった。

　だけどそれ以上に、雪華は幸福だった。だんだんと眠たくなっていく。この時間が、永久に続けばいいと願いながら。

ぼうっとした意識の中、雪華は奇妙な浮遊感と安心感に包まれながら目を開ける。
「おはよう、雪華」
気怠げに熱を持った身体。怜の言葉に頷きながら、身体を怜に預ける。全身がぐったりと脱力して、何もする気がしなかった。そんな雪華を、怜は優しく抱きしめる。抱きしめられて初めて、雪華は裸だと気付いたらしい。目で何か身を隠すものを探すが、見つからない。
「恥ずかしいの？」
その言葉に、雪華は顔を赤く染めて俯く。
「何も恥ずかしがらなくていいよ。雪華はとっても可愛いから」
そこで怜はいたずらな笑みを浮かべる。
「ねぇ、このまま外を散歩しない？」
とたんに雪華は首を横に振って怜にしがみつく。
「や、だ……」
「冗談だよ、雪華。可愛いから、からかってみたくなっちゃった」
そのまま、暫しの沈黙が訪れる。汗ばんで火照った身体が気持ち悪いのか、程なくして雪華はシャワーを浴びたいと言った。そうでなくても身体は血や唾液、汗で汚れており、シャワーを浴びるという作業は必要だった。

雨の音はこま切れな音だ。シャワーのそれとは違う。適温に調節された温水が、少しも途切れることなく雪華と怜に降り注ぐ。その音は少し煩いほどだが、今は不快ではなかった。
「……ねぇ、雪華」
「どうしたの？」
「愛……してる」
その言葉に、雪華は何も言わなかった。ただ黙ってシャワーの温度

調節を「冷」にする。とたんにヘッドから冷水が降りかかり、それを雪華は嬉しそうに浴びていた。
　そんな雪華の笑顔を、黙って見ることが怜にはどうしてもできなかった。

　こんなにも胸が熱くなるのは何故？

　頭が答えを出す前に、怜の身体は動いていた。雪華を抱き寄せ、顔をこちらに向けさせる。突然のことに身動きのとれない雪華に幾度となくキスをする。雪華が最高の表情を浮かべてくれるまで。

始まりの鐘が響く　2―5

不意に、雪華が膝をついた。力が抜けてしまったのか、ちょうど怜のお腹に雪華がもたれ掛かる。雪華は目を伏せ、身体を怜に預けていた。
怜はゆっくりと雪華を仰向けに寝かせる。シャワーを温水に戻し、シャンプーをスポンジに含ませて泡立てる。それで雪華を洗おうとしたとき、怜はあるものを見た。
あらわになった雪華の胸の真ん中に、左右対称に広がるピンクの羽の形をした紋章。さっきはなかったものだから、雪華もきっとこの存在には気づいていないだろう。そう考えると、怜はある悪戯を思い付いた。
「雪華、目を閉じて。開けていいって言うまで、開けちゃ駄目だよ」
言われるがままに雪華は固く目を閉じる。そんな一途な雪華が、とても愛おしく感じた。

身体を洗い終えると、怜は雪華の身体をバスローブで包み、髪をタオルで拭いた。バスローブがあらかた水分を吸い取ると、胸の羽の紋章が見えるように胸元を緩め、雪華を脱衣所の姿見の前に立たせる。
「雪華、目開けてもいいよ」
「……！」
そう怜が言うと、雪華は眩しそうにしながら目を開けた。
頬を真っ赤に染め、カタカタと、雪華が震えているのが分かった。
「雪華？」
「……嫌、見ないで……」
胸を隠そうとする手を、怜はそっと掴んで隠せなくする。
「どうして？　こんなに可愛いのに。

雪華、服着よっか。風邪ひいちゃう」
雪華は「うん」とは言ったが、震えるだけで身体が動かない。極度の緊張で筋肉が萎縮し、身体を動かしたくても動かないのだ。そんな様子を見兼ねた怜は、雪華の緊張を解くために耳を甘噛みした。
とたんに雪華の身体は尻餅をついたように崩れ落ち、怜も体重を受け止められずにそのまま床に倒れ込む。
「ご、ごめんね怜」
「怜？」
らしくもなく慌てる雪華。怜はそれを無視して、雪華を抱き寄せる。
「もう一度だけ、キスしていいかな？」
「……うん」

結局、母も絢乃も何も言わなかった。しかし、学校をサボったのはまるわかりだったようで、帰ってきたときは二人とも少しだけ苦笑していた。

夕食のあと、疲れのあまりそのままテーブルに突っ伏した雪華を、絢乃は無理矢理起こした。
「雪華、そんなところで寝ちゃダメだよ」
「うにゅう……」
意味不明の寝ぼけ声を聞きながら、絢乃は何とか雪華の部屋にまで運んだ。パジャマに着替えさせ、ベッドに寝かせるだけでひどく疲れを覚えた。
「全く……世話の焼ける妹なんだから」

眠ってしまった雪華の幸せそうな表情を見て、絢乃は軽くため息をつく。このまま一緒に寝ようと、絢乃は雪華のベッドに潜り込んだ。

「ん……」
「起きた、雪華？」
「……おはよう、お姉ちゃん」
「おはよう」
時計を見ると、いつもより少し早かった。挨拶したきり、黙々と身支度をする雪華と、それを見る絢乃。そんな沈黙が続いたあと、不意に雪華は呟いた。
「昨日のこと、何も言わないんだね……」
「…………見当はつくからね」
そう絢乃が言うと、雪華は顔を真っ赤にして部屋から出ていった。

どうしてなんだろう。胸が焼けるように熱い。身体が疼く。怜に会いたい。怜と会えれば、きっと胸の熱さも疼きもおさまるだろうから。
「おはよう、雪華」
「怜っ！」
玄関を開けると、怜の姿があった。雪華は真っすぐに怜に抱き着く。怜はしっかりと抱きしめてくれた。怜の身体の温かさ、囁かれる甘い言葉、なにもかもが嬉しかった。

そんな二人を、絢乃は二階の窓から見ていた。

「やっぱり、お似合いだね。末永く幸せでありますように」

始まりの鐘が響く　3―1

朝、電車内はひどく混み合い、一定のリズムで車体が振動を伝える。悧奈はドアの近くにもたれ掛かっていた。

何となく気分がすぐれなかった。睡眠も食事もきちんととっているはずなのに、疲れきって、飢えに苛まれているような感覚だった。

どうして、こんなに苦しいのだろう？

自問したところで答えは出ない。電車はただ進んでいく。

がたん、とドアが開く。雪華は少し驚いて俯けていた顔を上げた。クラスの中の空気が、それまでの甘い感じから一挙に変わる。入って来た悧奈が発散する得体のしれないオーラは、それだけの迫力があった。

「怜……」

雪華は怯えたように怜の服の端を握る。「大丈夫だよ」、そう囁いて怜は雪華の手を取る。

不思議と、恐怖が取り除かれたような気がした。怜がいてくれれば、何かを心配する必要も怯える必要もない。

理由もなく、そんな気がした。

そんな二人を、悧奈は見つめる。

授業の内容は、頭に残らなかった。知識欲などというものよりも、本能のような「飢餓」を悧奈は感じていた。

何かが、ひどく欠如しているような――

「お疲れ様です」
「お疲れ様でした」
撮影スタジオで、ファッション雑誌向けの撮影が終わった。カメラマンやスタッフに挨拶をしながら、悧奈が姿を現す。シンプルな黒を基調としたブラウスと膝丈のスカート、踝より少し上で折り返されたショートブーツを身に纏った彼女は、蠱惑的な笑みを浮かべて楽屋に入っていく。
中に誰もいないのを確認すると、悧奈は乱雑に服を脱ぐ。ブーツも手荒く脱ぎ捨てると、彼女はソファに身を沈めた。
酷く疲れていた。なのに、感じている飢えは収まらない。
ただ、とっかえひっかえ人形のように衣装を着せられて写真を撮られるだけの存在。文字通り私は人形(アイドル)なのかも知れない。周りに流され、ただ魂のない人形。
望んでいた世界は、こんな世界ではなかったはずなのに……。
悧奈は小さくかぶりをふった。これ以上ここにいても無意味なだけだ。服をハンガーラックにかけ、学校の制服を着ける。少し、気持ち悪いと感じた。

悧奈はエレベーターから出た。駅前の一等地に建てられたマンションの最上階、その一室が悧奈の家だ。両親は出張や旅行でほとんど家にいない。例に漏れず、今日もそうだった。むやみやたらと広いだけで生活感のない「家」。
悧奈は着替えると、台所で有り合わせのものを調理する。食べ終えてからしばらくはテレビをぼうっと見ていたが、すぐに飽きて電

源を切った。

ジャージのポケットにバタフライナイフを滑り込ませて、悧奈は夜の街に消えていく。

通りから裏道に入り、少し歩くと広い公園がある。公園と言っても、グラウンドの一部に芝を敷いてベンチをおいたような作りだ。昼は野球やサッカーに興じる子供達で賑やかだが、こんな夜に来る人はいない。ただ青白い水銀灯が、公園を蒼く染めている。

悧奈は折り畳まれたナイフを掌で一閃させ、刃を出して固定する。この種のナイフは遠心力で素早い刃の出し入れができるものだ。それを幾度か繰り返し、彼女はその手を止めた。

足元の、くすぐったい感触。悧奈は足元を見る。それは猫だった。白い体に、ところどころ黒ぶちのある猫。猫はまるで母親に甘えるかのように悧奈の足にじゃれる。

それを見ていると、悧奈は心の中で「飢え」が増していることに気づいた。

胸に疼痛のようなモノが走る。抑えられない苦痛だ。

痛い。

苦しい。

どうして私はこんなに苦しむの？

さっ、と遠心力に従って飛び出したバタフライナイフの刃が光を反射して煌めく。

刃を固定するロックの奏でる音は軽やかな鈴の音のようで。

とても純粋なその姿は、それが命を刈り取る凶器にはとても見えない。

全ては、一瞬だった。

始まりの鐘が響く　3―2

猫は眠っているようだった。
夜の闇すら敗退する、紅い血を一カ所開いた傷口から流していなければ。
悧奈は笑っていた。そこには侮蔑も嘲弄も入ってはいない。ただ嬉しいから笑っていた。
「あははっ……。ありがとう」
彼女は感謝を込めて、もう息のない猫を、血で汚れるのも構わず抱き抱える。
「おやすみなさい」
そう告げると、猫の死体を茂みに置いて立ち去った。
まるで羽根が生えたかのように、身体が軽い。達してしまった後の、満ち足りた感覚に似ていた。
まるで、麻薬みたいだ。そう、ぼやける意識の中で悧奈は思考した。

放課後の教室。夕日で茜色に染まる中、雪華と怜はいた。
「怜……？」
「ここにいるよ」
意味もなく、怜を呼ぶ雪華。それに答える怜。会話自体に意味はなかった。話し掛ける、その行為だけが重要だった。
不意に、怜の首筋に腕を回す雪華。お互い見つめ合う格好で、怜は雪華の視線を受け止める。
ふと、怜は自らの中に情欲のようなモノが芽生えているのに気づ

いた。
「……雪華、」
抑え切れない、雪華への熱が溢れ出して、
「キス、したい……」
そんな単語の結晶として吐き出され、
「いいよ、怜」
雪華はそれを受け入れてくれた。その柔らかくて可愛らしい唇を、自らの唇で濡らすのが何故か躊躇われた。

馬鹿らしいほどに理由ははっきりしていた。今になって雪華を壊すことに恐れをなしている部分が、躊躇わせているのだ。
逡巡している間に、首に腕が回された。ひんやりとした、冷たく細い腕。雪華の腕だ。
「……怜、頂戴」
顔が近づく。そう催促する雪華の頬は、仄かに赤く染まっていた。

ゆっくりと唇を重ねる。みずみずしい雪華の唇を割ると、とろりと雪華の唾液が口内に流れ込んだ。
「んっ……」
雪華の香りが胸郭いっぱいに満ち満ちて、怜はむせ返りそうになりながら唾液を飲む。それは虜になってしまいそうなほど甘くて濃密だった。
ちろちろと、雪華の舌が歯をくすぐる。お返しとばかりに雪華の綺麗な歯を弄ぶ。
酸欠のせいか、頭に霧がかかったようにぼうっとしてくる。間断なく注がれる快楽が全身を占拠していく。
足は震えて脱力し、身体を預ける以外に姿勢を支えられなくなっていく。

お互いを貪り喰らいあい、永遠に続くかと思われた快楽は終焉を迎えた。唇を離すと、透明な唾液の橋が一瞬だけ唇を繋いだ。
怜は椅子の背に身体を預け、雪華はそれにしな垂れかかる。徐々に静かになっていく心音を聞きながら、雪華は呟く。
「私ね、幸せだよ……」
「雪華？」
「今が、幸せなの。嬉しいの。怜がいてくれるときが。
……もう一度、して？」
怜は雪華の頬に手を添えると、もう一回キスをする。
いたわるように、ゆっくりと。

時間は無情に流れていく。快楽の余韻に浸っていると、閉めていたはずのドアが唐突に開く。
突然の出来事に戸惑って、ただでさえ密着している身体をさらに寄せ合うことしかできない。がらんどうの教室に響く声。
「教室閉めるから早く帰ってくれ……」
学級委員長の萩原俊樹がいた。いっとき雪華と怜はあからさまにうろたえていたが、落ち着くと渋々ながらも帰り支度を始めた。
雪華が一足早く鞄を肩に掛けると、俊樹に声をかける。
「萩原君、首……どうしたの？」
俊樹の首筋には四角い絆創膏が貼られており、それを雪華は心配していた。
「ああ、ちょっとヘマしただけだ。気にするな」
「……ならいいけど、気をつけてね。

怜、まだ？」

「今いくからちょっと待ってっ」

賑やかに教室を出ていく二人の声が遠ざかってから、俊樹は呟いた。

「言えねぇよ……。あいつにされたのに……」

始まりの鐘が響く　3―3

あいつは……どうしてああなったのだろう？
彼の心は、ある日の夕暮れにまで時を遡航していく――

閑静な住宅街の中にある公園。その芝生に遠足で使うビニールシートを持ち出して、幼稚園ぐらいの子供達が家族ごっこに興じていた。その中で一際目立つ、長い黒髪をした少女。
あの頃の悧奈は優しくて強い、だけど脆い女の子だった。とても気丈で、優しいがゆえに誰にも頼らずにいた。
しかし、ただ一人の例外がいた。彼女の姉、志沢瑞奈だ。悧奈よりも三つ年上になる瑞奈は公園の近くのマンションに住んでいる子供達の姉のような存在だった。
実姉という身近さからか、彼女に対して悧奈はひどく甘えていたことを知っている。
瑞奈はもういない。悧奈が小学二年生の時に、交通事故でその命を散らした。現場に居合わせたわけではなかったが、葬儀には参加したし、今でもたまに瑞奈の墓にお参りもする。そして、いつも悧奈が首から下げているロケットには瑞奈の写真が嵌め込まれているのを、彼は知っていた。

だから、彼女は折れてしまったのか？
誰にも傷ついて欲しくないと思えるほどの優しさのせいで、壊れてしまったのか？
頼れる人もおらずにただ自らの心を摩耗させ、狂ってしまったのか？

首筋の鈍痛が、彼の記憶を新しくさせる。あの時の悧奈は、異様だった――

彼はコンビニでジュースを買うつもりで、外に出た。コンビニは彼の住んでいるマンションから見て公園の向こうにある。律儀に迂回していたのではとんでもない時間を食うため、公園を突っ切って行くのが当たり前になっていた。

そこにあったのは、血に塗れて息絶えている猫の死体と、それを抱えて笑みを浮かべ、ふらふらと立ち歩く幼なじみの姿。

いつも私服として着ているシックなチェック柄のワンピースは血に染まり、その笑みは見る者を恐怖の縁に突き落とすかのような狂気を湛えている。

全身が緊張で硬直し、彼は足に根が生えたように動けなくなる。そんな彼を悧奈は見た。ゆらゆらと近づくと、猫の死体を茂みの影に置く。

それを視線だけ動かして見ていると、軽い衝撃が身体に走る。血に濡れた腕を彼の首筋に回す。少し前まで同じくらいだったはずの背は悧奈が見上げる必要があるほどに差がついていて、彼はそれすら気付かなかった自らの迂闊さを恨めしく感じた。

「……どうした？」

無理矢理引きずり出した言葉。そんな音声を無視して悧奈はゆっくりと耳元で囁く。

「二人きりになるの、久しぶりだね。それに、こんな遅くに。ねぇ、悪いことしてると、なんだかドキドキしない？」

そう言って、彼の頚椎に指を這わせる悧奈の姿はひどく妖艶だ。身

体の神経が集まる頸椎をさすられ、理性とは無意識に鳥肌が立つ。
「私ね、今すごくドキドキしてるの。真夜中に出歩いていること、猫を殺したこと、こうやって二人でいること。全部いけないことで、とてもぞくぞくしちゃうの。
俊樹くん、人を殺したら人間は、どれだけの快感を得られると思う？」
彼女は壊れている。そう彼は感じたが、何も言えずにいた。
「きっと、狂ってしまいそうなぐらいに気持ちいいと思うの。例えば、こんなふうに」
柔らかく暖かい悧奈の唇が耳元から首筋に降りる。強く強く唇が押し当てられ、さらにそこから整った歯が覗く。
彼は背筋に冷たいものが走るのを覚えた。悧奈が歯を立てた下には、頸動脈が走っているのだ。彼は何も出来ずに悧奈の玩具のように弄ばれる。
歯が皮膚を裂き、血が滲む。その下で動脈は脈動を続けている。
「俊樹くんの命を壊すって考えただけで、もう気が触れてしまいそうになるの。身体が熱くて、もう我慢できそうにないぐらいに。
もう寝るね。お休みなさい、俊樹くん」

ショックだった。
どうして自分は彼女の苦しみや辛さに気付けなかった？

俊樹は苛立ちまぎれに、肩にかけていた鞄を手荒く床に叩きつけると、何度も何度も鞄を蹴りつけた。

始まりの鐘が響く　４―１

夕陽は二人を柔らかく包んでいた。唯一無二の親友と一緒に、寄り添って帰り道をたどる。ほんの少し恥ずかしげに、だけど嬉しそうに歩いていく。
「怜……」
「雪華？」
「ここで、たくさん恥ずかしいこと、したよね？」
ふとした呼びかけに、怜は答える。
唐突に雪華は怜に抱き着く。
「だから、お返ししたいの。もう止められないよ？」
雪華の手が怜のスカートに伸ばされ、たくしあげられた。そこから垣間見えるショーツの中に、雪華の細く綺麗な指が差し入れられていく。
「ゆ、雪華……」
「……ごめんね、怜。こうでもしないと、私、繋がっていることが確かめられないの」
「ううん、違うの。雪華が感じてくれるなら、雪華の、好きなようにして？」
「怜……ありがと」
少しずつ、指が怜を浸食していく。だが、その浸食は怜を満たすことなく終わる。
「……雪華？」
「これで、おしまい」
中途半端に焦らされた怜の中は、熱く疼いていた。
「嘘……。ひどいよ……」
「だって、お返しだから。また明日ね、怜」
「うん……」
その横顔はほんの少し寂しげで、雪華はもう一度、怜を抱きしめた。

衣服を赤く染めた血は、下着をも染めていた。
それほどに、自分の業は大きいらしい。当然と言えば当然かもしれない。
私は、身勝手な理由で命を奪い傷つけたのだから。

風呂場でシャワーを浴び、血を落とした。適温に設定されたそれは心地いいものだった。残った血の臭いは圧倒的な石鹸の香りに包まれて、鼻腔を刺激する力はない。残ったのは無為に生物を殺した事実だけだ。こうやって、私は忘れる。
バスローブだけを羽織って、自室の椅子に座る。目の前のテーブルには、縫いかけのまま放置された黒い布。同じ黒いレースが中途半端に垂れ下がり、フリルは白い糸で仮止めされただけだ。
二三日前から縫っていなかった。私はそれと針を手にして、中断していた作業を始める。
小さい頃から、フランス人形を集めていた。それはきっと、幼心に彼女達がただの無生物に見えなかったからだろう。
ベッドの後ろや脇には所狭しと人形達が並び、地震でもくれば彼女達に生き埋めにされてしまうかもしれない。それもいいかな、と私は針を動かしながら思う。
ガラスの視線が私を見る。それはセットで感じる、気味の悪いものではない。優しい、傍観者を思わせる視線。手触りのよい絹の生地に、細い絹用の針を差し込み縫いながら彼女達の視線を受け止める。

ごめんね、これが終わったら貴女達には少しの間、お洋服を作ってあげられない。だから、私は貴女達が喜んでくれるように、一生懸命作るね――

夜明けも近い頃。悧奈の腕に抱かれた人形は、縫いあげたばかりのドレスを着ていた。

その黒は闇と同化したかのように見えない。悧奈の心と同じように。

始まりの鐘が響く　4―2

夕暮れの予兆が見えだした頃、君島陽菜は職員室で一人伸びをした。
　そろそろ下校の門限も近い。教室を見回る必要があった。部活をしていた生徒も含めてほとんど下校しており、学校は静かだ。教室の巡回に行こうとすると、入口から声がした。
「失礼します。君島先生はおられますか？」
「あ、志沢さん。どうしたの？」
入ってきたのは悧奈だった。彼女は陽菜の前まで歩き、目の前に立つと――
鞄で、思い切り陽菜のこめかみを殴りつけた。何も言えずに床で伏している陽菜を見ながら悧奈は言った。
「先生に怨みはありません。今から行く、あの二人もそうです。だけど、私は彼女達が羨ましいから、行きます。さようなら、先生」

悧奈は三年生の教室まで、足音を殺して歩いていく。案の定、二人はいた。
ドアは閉じられている。つまり、開ける必要があり開ければ気付かれる。
――――なら、速攻だ。悧奈はバタフライナイフを取り出す。刃を出し、右手に力を込める。高ぶっている気を落ち着かせるため、悧奈は一つ深呼吸をつく。そしてドアの取っ手に手をかけ、引いた。
教室には二人の少女がいた。まずはあの少女を殺ろう。
銀の髪の少女を。

一瞬のことだった。乱暴にドアが開けられる音とともに誰かが入

ってきて、怜が私の背中に回って、
　気がつくと、怜は倒れていた。
「……怜っ！」
「雪華……無事で、よかった」
背中の傷口から溢れる血は床に血溜まりを作りだし、制服を真紅に染め上げる。
「無事なんかじゃないよ、怜、死なないでっ！」
「怜、いっちゃだめだよ……！」
血に汚れることも厭わず、雪華は怜の側にしゃがみ込む。
出血の度合いはかなり早い。恐らくは動脈にまで達している。しかし、雪華は大量出血に対する止血法を知らない。
　背後に悧奈がいる状況では携帯も使えず、彼女に出来ることは最愛の人がゆっくりと死んでいくのをただ見るだけだった。
「私を置いてかないで、怜っ……」
残された生命を燃やし尽くしたのか、怜の瞼がゆっくりと閉じていく。
「置いてなんか、いかないよ。ずっと、雪華と一緒いるから……」
暖かく、柔らかいものが雪華の頬に当たる。怜の手だ。
「怜っ！　眠っちゃダメだよ！」
「……ごめんね、なんだか、すごく眠いの。おやすみ、なさい」
頬に当てられていた手が突然落ちる。雪華は怜の胸に耳を当てる。
もう、怜の胸から心音は聞こえない。
「れ、い……」
物言わぬ怜の唇に、雪華はキスをした。
「怜がいないなんて、寂しいよ……」
　――――決然と悧奈に振り向く。その紅い瞳に迷いはない。
「私を、怜のところに連れていって」

予想外の事態に硬直している悧奈の手を引く。事態を理解した悧奈は雪華に問い掛ける。
「西川さん、あなたは怖くないの？　私を恨んだりしないの？」
「怖くはないよ。ただ、この世界から消えることで家族が悲しむことが心配なだけ。
それに、志沢さんを私は責めることができない」
「えっ……」
「志沢さんの目。もう、何かを壊さないと耐えられないぐらいに壊れてる。
私は志沢さんの過去や家庭を深くは知らない。だけど、私にでも分かるぐらい志沢さんは壊れてる。
これが、最後になるように祈ってる。早く、私を怜のところに行かせて？」
雪華は血に構わず怜の側に座ると、悧奈の手をとってナイフの切先を自らの胸に向ける。
それに呼応するように、悧奈の腕は真っ直ぐに突き出され。
皮膚を裂き肉をえぐり心臓を貫き。
「さようなら」
銀の髪の少女は、その生命を散らした。

悧奈はゆっくりと椅子に座り込む。目の前にはただの肉塊と化した二人の少女。それを悧奈は妙に醒めきった無表情で眺め遣る。
心を高ぶらせるわけでもなく、かといって落胆させられたわけでもなく。
残ったのは八十キロ弱の有機物の塊と、悧奈が人間を殺した事実だけ。それは日頃の苦しみを忘れさせる麻薬になりはしない。

全てが抜け落ちたような、空虚な時の中。逃げることも忘れて、じっと息絶えた少女達を見る。
不意に爪先が発光し、そこから数条の光が迸る。緩やかな螺旋状を描いて互いに絡み合い消えていく。悧奈の目には、光のレースが織り成され消えていくように見えた。しばらく見ていると、光に包まれた部分が消えていくのが確認できた。

そのとき感じた違和感。爪先の感覚がなくなっていた。悧奈は自らの足元を見る。
爪先は消えていた。切断されたわけでも出血しているわけでもない。字義通り消えていた。
生きて辱められもせず、死して罪を償わされることもなく、ただこの世界から消える。
これが私の業らしい。そう悧奈は考えると、目を閉じた。最後に情報として伝えられたのは、手にしていたナイフが落ちる、金属質の音。

教室に残されたモノは夥しい血痕と、柄まで血に染まったナイフ。たったの、それだけだった。

始まりの鐘が響く　4―2（後書き）

これで第一章「始まりの鐘は響く」は終了です。

第二章からは新キャラも出て、ファンタジーとして本格化していきます。ご期待ください。

実体はないはずだった。なのに、柔らかくて暖かくて甘い感覚が全身を満たしていた。

そしてそれは切断され、冷たいものの中に身体は沈んでいく。だけど、

その冷たさは気持ち良いものだった。

「もう……楓香ったら遅いんだから……」

夜道を一人の少女が歩く。Ｔシャツにジーンズ、さらにスニーカーという活動的な服装をした少女は呟いた。腰に下げたナイロンのホルスターには重厚なブローニング・ハイパワー拳銃を差し込んでいるが、本人は至って自然体で歩いている。

「少しは待ってる方の気分を味わうといいわ……」

彼女は軽く毒を吐くと、お気に入りの場所に足を向けた。

そこはいつ来ても綺麗な場所だ。小さな湧水池を中心に植生を壊さないよう慎重に人の手が入っており、湧水であるために凍ることも水量が極端に減ることもなく透明な水を湛えている。

昼間や休日にはそこそこ人気のある場所だが、今頃来る物好きはあまりいない。それでもここが彼女は好きだった。

「？」

ふと池の向こう側に目を凝らすと、何か白い物体が転がっていた。近づいて見ると、それは銀の髪をした一人の少女だった。透明な池の水に半身を浸し、眠っているように見える。着衣の類いはなく、その真っ白できめ細やかな肌を外気に曝していた。彼女はその真っ白な少女に見とれて、ぼうっと立っていた。

僅かに幼さを感じさせる、可愛らしい顔立ち。瞼は閉じられ、長い睫毛が顔の陰影をはっきりさせている。ほっそりとした肢体は少女らしさを色濃く留めており、胸は控え目ながらもはっきりと二次性徴を伺えた。お腹はぺったりと滑らかで、その先に生えている陰毛もまだ薄い。しかし、その陰毛が水中でゆらめいている様子に、彼女は妖艶さを感じ取った。

とりあえず起こさなければならない。三月とはいえ下手をすると風邪を引いてしまうし、邪（よこしま）な考えを持つ者からすれば絶好のカモだ。

「大丈夫？」

抱き上げると、身体が吸い寄せられるような感覚。ああ、この少女は水の属性なのだな、と火の属性を持つ彼女は直感した。

この世界には「魔法」というモノが存在する。扱えない者もいるが、扱える者は大きく分けて火、水、風、地、光、闇の六つ種類がある。光と闇の属性を持つ者は稀で、一人の人間が二つ以上の属性を持つことはない。

では、どうして彼女は身体が吸い寄せられるように感じたのか。それは属性の持つ特性のためだ。

空間中に正八面体があると仮定して、頂点に光、一番下の頂点に闇、残り四つの頂点に火と水、風と地が対角線上になるよう置く。そうして光と闇、火と水、風と地をそれぞれ直線で結ぶと、正八面体の重心に三本の直線が交わる。そこが魔力で最も安定している地点だ。そこには便宜的に「無」という名がついており、魔法が扱えない者はこの正八面体の重心近くに集まっている。そして魔力は安

定しようとして、対角線上にあれば引き付けあう習性のために属性が判明する。

何度か揺さぶると、少女は気怠げに目を開けた。
「あなたは……だれ？」
「私は紫苑。三原紫苑」
かなり体力を失っているのか、舌っ足らずな声だ。少女は続ける。
「……紫苑さん、ここはどこ？　お家に帰りたい……」
少女の唇が紡ぎ出した、その言葉を聞いて紫苑はある魔力現象を思い出す。

ミセリコルディア現象。

未だもって解明されていない数少ない魔力現象の一つで、これになると魔力の大幅な増加を伴う（単純に魔力が増加したり、魔力の結晶である翼が展開できるようになったりと、効果は様々）。さらに前世の記憶を見た、「経験」したという副次現象、さらに重度であれば体力の消耗、前世との記憶の部分的な「書き換え」などが発生する。
よほどの重度でなければ別段何かしらの目立った害がある訳でもなく、発生率は低い。また、重度であっても医師免許を必要としないほどの簡単な施療で日常生活に問題ないレベルにまで回復する。だが、その体験を綴った書籍は数多くあり、最も有名な魔力現象の一つでもある。

その施療の糸口を見つけるため、というより個人的な興味で紫苑

は尋ねる。
「ねぇ、あなたの名前、教えてくれる？」
少女は相変わらずの舌足らずな声で応じた。
「……雪華。西川雪華」
「綺麗な名前……。漢字はどう書くの？」
「降ってくる雪に、華道の華」
そう聞いて、紫苑は心中で頷く。確かに彼女の身体は雪の結晶ででできたかのように真っ白だ。
名前を聞いたところで、紫苑はミセリコルディア現象の施療をすることにした。まずは一時的にほとんどなくなっている魔力を少し与える必要があった。
「雪華ちゃん、これがファーストキスだったら……ごめんね？」
そう断って、紫苑は雪華に口づけた。

魔力は空気や食物といったものの粘膜接触を通じて蓄積される。そのため、魔力をほとんど失っている雪華に紫苑はキスという形で粘膜接触を行い、回復に最低限必要な魔力を蓄積させたのだ。

しかし、それを終えたあとも紫苑はキスをやめようとしない。雪華の歯を、舌を、まるで舐め尽くそうとするかのようにいたぶる。

ようやく解放された雪華は顔を赤らめ、弱々しいながらもはっきりした声で紫苑に問う。

「どうして……こんなことを？」

「気付けだよ。雪華ちゃん、家の場所、分かる？」

「……ううん。わからない」

「そっか。じゃあ、私の家に来る？」

「いいの？」

「私はいいよ？　煩くてわがままな同居人がいるけど」

「じゃあ、お邪魔するね」

「よろしく、雪華ちゃん」

「うん」

紫苑は雪華を抱き抱えると、魔力の結晶である翼を展開する。身体と物理的に接続されている訳ではないので、衣服が破れることはない。ほんの僅かな熱気が肌を撫でる。とん、と地面を蹴ると紫苑の身体は星が煌めく夜空に舞い上がった。

そんな頃。外崎楓香は通っている魔術学校に付設している射撃場の近くのコンビニの駐車場でジュースを飲んでいた。

「学校の射撃場って暑いのにどうして自販機ないのかなぁ……」
ぼやきながら、飲み終わった空き缶をごみ箱に投げ込む。コン、と小気味のいい音がして空き缶はごみ箱に消える。
「……ん？」
何やら路地から下品で騒がしい声が微かに聞こえてきた。
「参ったなぁ……拳銃のマガジンもうないのに」
射撃練習用に持ってきた十本ばかりのマガジンは気前よく撃ちまくったせいで全て空だ。
「まあ、いっか？」
彼女は頼りなさげに呟くと、声の聞こえる方向に歩く。物陰からこっそりと伺うと、何人かのいかにもといった感じの男達が一人の少女を囲んでいた。どのように始末をつけるかで話し合っているのだろう。幸いにして後ろはがら空きだ。楓香は短い詠唱を呟く。
「束縛せよ、《アースチェイン》」
攻撃魔法でノックアウトさせようとも思ったが、それは外れた場合、少女に危害が及ぶ可能性を考えてやめておいた。必ずしも悪党どもに手加減した訳ではない。
地面を走るような感触とともに、楓香の体内から詠唱と共に形作られた核が周りの魔力を巻き込みながら直進していく。予期した通りに核は対象の真下で開放され、細い金属の鎖の形をとって男達に絡み付いた。
「な、なんなんだっ！」
圧倒的な優位に浸っていた彼らの顔がみるみるうちに引き攣っていくのは見ていて爽快だ。もがいてさらに鎖に絡まるという失態を犯している彼らを尻目に、無理矢理束ねた短いポニーテールをぴょこぴょこと跳ねさせて、楓香は少女の前に踊り出る。耳障りな騒音にはこの世から一時的にご退去願い、楓香は少女に話し掛ける。
「大丈夫？」
少女は極度の緊張のためか意味を為さない単音を切れ切れに漏らすだけだった。手を取って引っ張ってもまるで動こうとしない。緊張

のせいで身体が硬直し、随意筋が動かないのだ。
楓香は相手の緊張を解くために、少女の耳に息を吹き掛けようとする。しかし、あまりに身長差のあるせいで、爪先立ちしても届かない。小さいのは損だと楓香はつくづく思う。
結局、少女の首に腕を回し、腕力だけで顔を耳の下に持っていくという無茶苦茶な方法を取らざるを得なかった。ふっ、と息を吹き掛ける。
「きゃっ！？」

効果は絶大だった。確かに緊張は取れた。しかし。
「ごめんなさいっ！　大丈夫ですか？」
無茶な姿勢のため、楓香は緊張が取れてへたり込む少女の下敷きにされてしまったのだ。下敷きにしてしまった少女は水飲み鳥のように何度も繰り返し頭を下げる。
「ん……大丈夫だよ。一応頑丈にはできてるから「本当にごめんなさい！」
このままではらちがあかないと判断し、楓香は少女を宥めてから言った。
「とりあえず、明るいところに行こう？」

硝煙と魔法の異世界　1―3

なんだか気まずい。それが今楓香の感じている状況だった。

あのあと、ごめんなさいを連発する少女を沈黙させてから、さっきジュースを飲んでいたコンビニまでとって返した。そこで気を落ち着かせるためにまたジュースを買い、少女が口を開いたままでは良かった。

だが、今は見事に会話が止まってしまっている。時折、躊躇いがちに飲み物を飲む音がするだけだ。

とりあえず聞いたことをまとめてみる。少女は風見怜と名乗り、いつの間にかここにいたらしい。そして見知らぬこの青葉の街で右往左往していて不良に捕まって、楓香に助けられたらしい。

……正直、まとめる必要が感じられないぐらいの代物で、楓香は激しく心中で落ち込んだ。そんなときの助け舟。

「……あの、外崎さん」

「楓香でいいよ。私も風見さんのこと怜ちゃんって呼ぶことにする」

身体の至るところが子供子供している楓香とは違い、怜はとても大人っぽい。肩口までのショートに揃えた真っ黒な髪。切れ長の目には理知的な鋭さと母性にも似た優しさを湛えている。

「……信じてもらえないかも知れないけど、本当なの」

「誰も信じないなんて言ってないよ？　ところで怜ちゃん」

「楓香ちゃん、何？」

「家の場所……分かる？」

怜は首を横に振る。

「そっか。よかったら私の家に来る？　また不良（バカ）共に襲われちゃうかもしれないし」

「……うん、お邪魔するね」

そう言うと怜は、そのまま眠るように崩れ落ちた。

「怜ちゃん？」

とっさに駆け寄って支える。
「なるほどね。お疲れ様」
なんのことはない、ただの魔力切れだった。楓香は怜をしっかり抱きしめて、翼を展開する。水晶に似た硬質の翼は、闇に溶けるかのように澄んでいる。
楓香はふわり、と地を蹴る。彼女を、早く連れていってあげよう。

来客を告げるチャイムがした。今頃やってくる人間にはだいたい検討がつく。夜食のスープの火を一旦消し、玄関に向かう。玄関の鍵を外して、紫苑はインターホンごしに楓香に話し掛ける。
「遅かったね楓香、どうしたの？　鍵は開いてるから入って」
「それが開けられないから開けてーっ。事情があるんだよぅ……」
「事情？　まあいいけど……」
訝しみながら紫苑はドアを開ける。そこにいたのは、自分より大柄な少女を抱えた楓香だった。
シャワーの水音が雪華を包む。そんな中に混じる、チャイムの音と紫苑が玄関に向かう足音。
「どうしたのかな」
名残惜しかったが雪華はシャワーを止め、身体を拭くとバスローブを羽織った。
玄関が何やら騒がしい。バスローブだけということもあって、雪華は顔だけ出して玄関の様子を見る。そんな自制はすぐに吹き飛んでしまったが。
「怜っ！」
突然の闖入者に、怜を降ろしてバテていた楓香は驚いて飛びのく。その声に、怜は微かに目を開けた。
「ゆき、か……？」
「そうだよ……やっと、会えた」
「うん」

だけどまた瞳は閉じられてしまう。雪華は楓香に目を向ける。
「あなたが、怜を助けてくれたの？」
「う、うん……」
「名前、教えてほしいな」
何故か顔を真っ赤にする楓香。
「楓香、ちゃんと自己紹介しなさい」
「外崎、楓香って言います……」
そう言い切らないうちに楓香は首を垂れる。
「ありがとう、楓香ちゃん」
雪華は軽く楓香の身体に腕を回す。楓香はそのまま意味を成さない声を出して動かなくなる。
「楓香ちゃん？」
「もう……恥ずかしがりなんだから」
紫苑は呆れながらも、バスローブの襟を正す。
「あっ……」
今度は雪華が顔を赤く染める番だった。中途半端にはだけたバスローブから、真っ白な胸がかいま見えていた。

魔力切れで意識を失っている怜を、雪華と紫苑が両脇から支えてソファに寝かせた。紫苑が脈を取りながら雪華に話しかける。
「雪華ちゃんの時ぐらいに魔力を消耗してるね……。通常、ここまで魔力を使う事態なんて戦闘ぐらいしか思いつかないけど、どうしたのかな？
とにかく、このままじゃらちがあかないね」
魔法を扱う者が気絶するほどの魔力を消費することは戦闘であってもほとんどない。意識がなければ魔法を使うことはできないため、身体の自己防衛本能が意識を保つために最低限の魔力を残そうとするからだ。そうすることで空気や食物の中にある魔力を取り込め、使用できる。
　魔力を使うにおいて重要なのが、「認識」することだ。魔力自体はそれこそどのような生物にもある。しかし、認識できなければそれを使うことはできない。認識して、初めて使えると言っていい。そのため、物理的または魔力の欠乏で意識を失うと認識ができなくなり蓄積ができない。だから、粘膜を通して無理矢理に魔力を入れて脳に認識させる必要がある。
「脈拍や呼吸は正常みたい。雪華ちゃん、怜ちゃんにキスしてあげて」
「えっ……。う、うん」
眠っているようにしか見えない怜の唇を犯すのは、ほんの僅かな罪悪感とそれを大きく上回る背徳感でいっぱいだった。ゆっくりと唇を近づける。
　甘い香り。どこまでも溺れてしまいたくなる、怜の母性にも似た香り。漸く出会えた、暖かい安らぎ。
　撫でるように雪華は怜の中を壊していく。暖かくて甘くて心地好い、二人だけの世界。

不意に、腕が回された。それに気づいて雪華は唇を離す。
「おはよう、怜」
「雪華……。やっと」
「うん。ずっと会いたかった」
「もう少しだけ……お願い」
「わかった」
とてもとても、怜が愛おしい。本来の意味を忘れて、雪華は儀式に熱中する。
「用意できたよ……、っ！」
台所から顔をのぞかせた楓香は、折悪くキスの場面に遭遇してしまった。当然の帰結として楓香は顔を下に向ける。そんな楓香の傍に紫苑が立つ。
「楓香、目を逸らしちゃだめだよ」
「そんな……っ」
「もう、楓香は恥ずかしがりなんだから」
「いじわる……」
ゆったりと、紫苑は楓香をかき抱いた。

そんなこんなで、四人の少女は食卓についた。雪華と怜の体力の消耗を考慮して、消化のよいものが並んでいる。
「頂きます」
紫苑は何食わぬ顔で、雪華と怜はいささか恐縮しながら、楓香はまだ僅かに頬を赤く染めている。
「改めて、私は三原紫苑と言います。雪華ちゃん、怜ちゃん、はじめまして」
「と、外崎楓香です」
互いに自己紹介すると、和気あいあいとした雰囲気の中、食事は進んでいく。そこで問題が一つ発生した。
「紫苑、寝る場所はどうするの？」

「ん……詰めれば大丈夫じゃない？」
「なんと大雑把な……」
「万事適当な楓香に言われたらおしまいね……。一応こんなんでも私は中学生徒会長よっ！」
楓香のからかいに一人気をあげる紫苑。それに雪華は申し訳なさそうな表情を浮かべる。
「ごめんなさい、こんなに気を遣わせてしまって……」
雪華と怜が着ている服は、全て二人から貸してもらったものだ。さらに食事や寝る場所の算段までしてくれたことに、二人は負い目を感じていた。
「気にしないで。こうやって会えたのも、何かの縁なんだから。もう遅いね。明日は忙しいから、もう寝よっか」
そんな負担を気にしたふうもなく紫苑は言う。
それに異論はなく、就寝前のドタバタのあと、少女たちは眠りにつく。

夜。くすぐったい感触に、紫苑は目を覚ました。その原因は、雪華の背中から生えている羽だ。
人間にはレム睡眠とノンレム睡眠、二つの睡眠がある。レム睡眠時は脳が覚醒しているため、無意識ながらに魔力を認識する。その結果、羽が生えたりごく低威力ながら攻撃魔法が展開されることがある。
雪華のそれは、無意識ということもあって小さく可愛らしい。だけど、羽は精緻で細やかで、夜目にも分かるほどに真っ白だ。紫苑はその綺麗な羽を羨ましく思った。
しばらくその羽を指に絡めて弄んでいると、雪華の寝息の中にくすぐったそうな吐息が漏れる。だけど紫苑は指を止めない。とうとう雪華が目を覚ます。
「ん……だれ？」
「おはよう、雪華ちゃん」

「しおんちゃん……？　くすぐったいよ」

「そうだよ」

怜に抱きしめられた状態で眠っていた雪華にはなすすべもなく、紫苑にされるがままだった。

柔らかな羽の感触を指先に感じながら、紫苑は浅い眠りに落ちる。

「怜、起きて」
雪華は怜を起こしていた。紫苑や楓香はもう朝食の準備に取り掛かっている。しかし怜の眠りは深く、かれこれ十分以上雪華は格闘していた。ようやく怜を夢の世界から引きずり戻す。
「ん……雪華？」
「おはよう、怜。もう朝ご飯できるよ」
「うん」
だが、怜は起き上がろうとしない。
「怜？」
「眠り姫は何をされて起きる？」
一瞬雪華は目を白黒させたが、すぐに言わんとすることを解すると、呆れたように首をふった。
「怜ったら……もう」
　雪華は仕方ないな、と思いつつも怜の頬に手を当て、ゆっくりと唇を近づけた。

　怜をともなって台所に向かうと、すでに朝食の湯気が立ちのぼっていた。配膳をしていた紫苑が気づく。
「あ、怜ちゃんおはよ」
「おはよう……」
まだ眠気が取れていないのか、怜は眠たげに返事を返す。
「お茶碗とコップ出してくれる？」
「わかった。どこにあるの？」
「そこ」
朝は慌ただしい。だが、そこには日常がきちんと存在している。雪華はそのことが嬉しかった。それは、怜と一緒にいられるということ

とだろうから。
　食卓に一同が並び、朝食が始まる。朝食は和風だった。雪華は味噌汁に口をつけると、違和感に眉をひそめた。残すのは失礼なので目を閉じて一気に飲み干してから、雪華は尋ねた。
「ねぇ楓香ちゃん……」
「なぁに？」
「お味噌汁……ダシ入れた？」
　そう聞かれて箸をひとしきり開閉していた楓香は、唐突に机に伏せた。
「……忘れてたぁっ！」
　たちまち三人は吹き出した。特に紫苑は。
「……やっぱ楓香は適当ねぇ」
「ふんっ！　どうせ大雑把だよ！」
　微笑ましい会話の応酬の中、朝食は進んでいった。
　食事が終わり、食べ終わった者から順に皿をシンクに置いていく。
　紫苑が当然のように楓香に声をかける。
「楓香、当番お願いねっ」
「わかってる」
　楓香はそうは答えたものも、味噌汁のことを散々に言われたせいで腐っているらしかった。残りの三人はリビングに引っ込み、紫苑が今後のことを説明する。
「とりあえず、身元を探します」
「……どうやって？」
「コネで」
　紫苑はあっさりと断言した。絶句する二人。
「そ、それって……まずくない？」
「大丈夫。本人の許可があれば法にはかからないから」
　実際、ミセリコルディア現象によらずとも記憶を失う事例はある。その際に、本人または保護者の許可を得た上で、第三者が警察や役所などの公的機関を通じて、個人情報を知ることが可能になる制度

がある。
　しかし、それには楓香が必要だったが、懸案の洗い物が出来ていない。そこから待つこと十五分。ようやく楓香がリビングにやって来た。
「楓香ちゃん、コネって一体……何？」
「えっへへ～」
楓香は雪華の問いに、携帯端末のストラップを掴んで指の間からぶら下げる。丸みを帯びた長方形のそれを、楓香は手慣れた様子で携帯の画面を開き、ボタンを押す。
「紫苑、あとはよろしくね」
紫苑は頷いて携帯を受け取る。コール音が僅かに聞こえる中、怜が楓香に囁いた。
「誰に……電話してるの？」
「私のお父さんに。そこからなら戸籍情報を出せるから」
「楓香ちゃんのお父さんて、どこに勤めてるの？」
「県庁だよ」
それって職権乱用にならないだろうか、と雪華と顔を見合わせつつ思う。そんなことを気にした風もなく、紫苑は平気な顔で会話している。二人は時々聞かれる質問にあっけに取られながら答えていた。
　ようやく電話が終わった。紫苑が一息つき、携帯を折り畳んで楓香に渡すと、鬱陶しげに顔にかかる金髪をかきあげる。その表情には、呆れたような笑みが浮かんでいた。
「分かったよ。
ここの隣だった」

その言葉に呆然とする三人。楓香が狼狽えながらも確認する。
「し、紫苑……それって、本当に？」
「そうだよ。これでお隣りさんだね、ゆきかちゃんっ！」
そういうと、紫苑は雪華ににじり寄る。
「し、紫苑ちゃん、目が怖いよ……？」
雪華はあとずさろうとするも、その時には獣のように目を輝かせた紫苑が雪華を捕捉していた。
「いいなぁ、怜ちゃんはこんな可愛い子に起こしてもらえて」
紫苑が雪華の服の襟から背中をまさぐり、そのくすぐったさに雪華は身をよじらせる。
「や、ちょっ、紫苑ちゃん放してっ」
「やめてっ、背中くすぐったいからっ」
「すべすべしてて、気持ちぃい……」
「嫌っ、怜助けて」
さすがに嫌だったらしく、雪華は怜に助けを求めた。
「紫苑ちゃん、やめてあげて」
怜が止めに入る。手は止めたものも、紫苑は獣性を湛えた目で雪華を見ていた。襲われかけた雪華は、小さくなって怜の後ろに隠れる。
「紫苑、今は雪華ちゃんを襲ってる場合？」
楓香がたしなめるように、ぺちぺちと紫苑の頭を叩く。
「……ごめん。だけど諦めてないからねっ！」
「諦めなよ……。紫苑、身元は分かったけどさ、このあとどうするの」
楓香が無理矢理話を戻す。紫苑は考え込むように二人を見た。
「雪華ちゃんは見つけたとき裸だったから何も持ってないだろうし、怜ちゃんは何か持ってる？」
首を横に振る怜。

「……だよねぇ。大家さんとこ行くしかないかな。みんな準備して」

紫苑達の住まうアパートは六階建てで、その五階の一室が紫苑と楓香の住まいだ。この青葉市にある青葉魔術学校にほど近く、ここの住人のほとんどが魔術学校の生徒である。

魔術を使える人間はかなり少ない。この日本という国の約一億二千万の人口のうち、魔法を行使できる「異能者」は三百万人少し。総人口の僅かに2．63パーセントに過ぎない。それの行使や制御を教える魔術学校は、たいてい国防軍の駐屯地や大規模射撃場の近くに建てられている。

それはふざけた威力を持つ大型火器や対物魔法の実射が行えるだけの射撃場が必要な為だ。確かに通常の学校でも学習の一環として拳銃やライフルの実射はするが、そんなレベルとは桁が違うのだ。

また、魔法戦闘の訓練装置があるというのも特徴の一つにあげられる。いくら射撃場の規模が大きくても、下手をすれば地形が変わってしまう正式詠唱魔法の行使はできない。また、様々な状況に対応するため仮想現実での戦闘訓練を可能としている。

さらに、青葉魔術学校はある制度のモデル校としても有名だった。日本の国防軍には中隊以上の魔術行使部隊が存在しないため、大規模魔法戦闘の模擬訓練校の指定を受けている。その名の通り国防軍との連携をとって戦闘訓練を行う学校に指定されていた。これは異能者主体での近代戦遂行能力のデータを計るためだ。

そんな学校に彼女達は通うことになる。

大家さんこと、このアパートの管理人の早沢紬（つむぎ）は一階に住んでいる。聞いたところによると、紬は紫苑の叔母にあたる人らしい。「管理人室」というプレートがかかったドアを、紫苑はノックした。

「紬おば……やば、紬おねえさん、いる？」

「どしたの、紫苑ちゃん」

眠たそうな声がして、ドアが開く。紫苑は悪びれた様子もなく話を始めた。

「あのさ、５０４号室の鍵あったら貸して」

「へ？　５０４号室？」

まだ寝ぼけているのか、紬は寝癖のついた頭を掻きながら雪華と怜に視線を移す。

「……ああ、もしかして新しい住人さんなパターン？」

「は、はじめましてっ！」

二人は慌てて頭を下げる。紬はほんわかと場を和ませるような、優しい笑みを浮かべた。

「はじめまして。私は早沢紬と言います。お名前、教えてくれるかな」

「風見怜です」

「西川雪華です」

「風見さんと、西川さんね。ちょっと待ってて」

そう言って紬はパタパタと足音をたてて部屋に引き返すと、鍵と書類を持って出て来た。

「さ、お二人様ごあんな～い」

階段を紬を含めた五人で上っていく。エレベーターもあるのだが、何故か先頭を切った紬が階段を躊躇うことなく上がっていくので、少女達は黙々と後を付いていく。
ようやく目的の部屋に着き、紬は鍵穴に鍵を突っ込みドアと一瞬の攻防戦を経て、外開きのドアを開けた。
「開けたよ……って、なにもないわね」
隣室と同じ造りのその部屋に、家具調度の類いは一切ない。住まうにはかなり不便そうだった。
「えとさ……壁、抜ける？」
「……え？」
何もない空間を見回していると、楓香が唐突に提案した。唖然とする三人と、笑い出す紬。
「そんなことして……大丈夫なの？」
「構造上は問題ないよ」
しれっと言う紬。紫苑が雪華達を手招きで呼び寄せる。
「どうする？　私はいいけど」
「私も構わないけど……怜は？」
「雪華が構わないなら、それでいいよ」
とりあえず、全員が賛意を示したところで紬が纏める。
「それで決定かな？　では早速、準備しーましょっ」
そう言うと、紬はてきぱきと指示を出し始める。紬が提案したのは、玄関横の壁を抜く案だった。建物の構造上はどこを抜いてもいいのだが、他の個所は移動の困難な家具や荷物でまともに動かせない。
玄関周りの荷物……大抵は靴だが、それらをがら空きの隣室に運び込む。床が傷むとまずいので、新聞紙を敷いた上に荷物を置く。
一時間足らずで玄関付近の荷物を全て片付け終わる。あとのことは紬がやってくれるというので、お言葉に甘えて外で昼食を摂るこ

とにしたが、まだお昼には間があった。
部屋でぱらぱらと紬から貰った書類を見る。大した量ではないが、どれも大事なものばかりだ。その中の一枚を雪華はつまみ上げる。それは青葉魔術学校への転校申請書だった。
「紫苑ちゃん……」
「ん、どうしたの？」
「これ、行っとかなきゃやばいよね……」
「うん、やばいね。何ならお昼食べる前に行っとく？」
紫苑の提案に、雪華は頷いた。

徒歩五分という近距離に青葉魔術学校はある。問題は、その敷地の広さだ。国防軍の青葉駐屯地と並立して建っているのだが、その駐屯地の敷地にある入口から徒歩五分で行けるだけで、そこから学校の校舎はさらに七、八分歩かなければならない。
今、重厚で瀟洒な鉄のアーチ門が雪華達の前に立ちはだかっている。百年近く前に建てられたという鋳鉄の頑丈なものだ。それは半分ほど開けて固定され、黒を主体とした軍服を着た国防軍の兵士が二人、ライフルを構えて立哨している。雪華達に気付いた彼らは、にっこりと微笑んだ。
「こんにちは」
「いつもお疲れ様です」
挨拶した兵士に紫苑は軽く頭を下げる。そのあとを会釈しながら、雪華達は進んでいった。
青葉駐屯地の端を突っ切るように歩いていくと、平屋建ての射撃場の奥に校舎が見えた。たまに小火器特有の乾いた激発音が鼓膜を刺激し、微かな硝煙の匂いがした。楓香が指をさして校舎を示す。
「あれが校舎だよ。一階に職員室があるの。ねぇ紫苑、下妻せんせいると思う？」
「いるんじゃないかな。これだけ派手に撃ってるんだから」

実包を使用しての射撃練習には、一応教師の監督がある。
「それに下妻先生って暇人だしね」
それは余計なんじゃないかと雪華は思ったが、当の本人は全く気にした風もなく金髪を風になびかせていた。

硝煙と魔法の異世界　２―４

　春休みにも関わらず、職員室は賑やかだった。引き戸を開けると、職員室特有のコーヒーとインクの臭いがなだれ込んでくる。
「下妻先生はおられますかぁ？」
　軽く顔を出して、楓香が思い切り怒鳴った。職員室自体はかなり広いが、わざわざ怒鳴る必然性がない。その返答と言わんばかりに勢いよくドアが閉じようとするが、直前で透明な壁に阻まれる。
「くうっ……」
「遅いよ舞、やるなら言う前にやらないと」
　ドアのすぐ横に立っていた少女は、「襲撃」の失敗に歯噛みしていた。それに反して、ニヤニヤとそれを笑う楓香。
「どうした外崎、それにお前ら職員室に来る度にやってんな」
　呆れたように一人の壮年の男性が少女達に歩み寄る。
「あ、下妻先生」
「ん、三原か。どうりで外崎がここに来る訳だな……。それで何の用だ、話は机で聞くが」
「了解です」
　そう言うと、紫苑はドアの目の前で舞と痴話喧嘩を繰り広げている楓香の襟を掴んで引きずる。事態が理解できずに目を白黒させている二人を、紫苑が入るよう促した。
　職員室の奥にある下妻の机は、お世辞にも綺麗とは言えなかった。あちこちにプリントやペンが散乱し、僅かに空いたスペースはノートパソコンが占拠している。少し開いていた引き出しから、大量の空薬莢が見えたのは気のせいだと思うことにした。
「おい三原……そこの女の子達はここの地縛霊か？」
「……そんなわけないでしょう、先生」
　彼特有の下手な冗談に、紫苑は一見笑って答える。しかし目が笑っていない。そして紫苑の右腰から、カチッと小さな音がした。その

音を聞き取った下妻は、とっさに身の危険を感じたらしく僅かに顔を青ざめさせる。
「ああ、悪いな。話がそれた」
拳銃の安全装置をかけ、分かればいいのです、と言わんばかりの笑みを浮かべる紫苑。
「それで三原、何用なんだ」
「雪華ちゃん、怜ちゃん、あれ出して」
言われるがままに雪華と怜は転校申請書を取り出す。片手で器用にそれを受け取る紫苑の左腕は、楓香の襟首をきっちり掴んでいた。
「ん？　これは転校申請書……ああ、件の転校生か。
はじめまして、俺は下妻隼人。こいつらのクラス担任で、君達の担任だ。名前を教えてくれないか」
「西川雪華です」
「風見怜です」
青葉魔術学校は模擬訓練校という特殊さゆえに、規定より人数の少ない下妻のクラスへ優先的に転入させることになっていた。
「西川さんと、風見さんか。付いてきてくれ」
そう言うと、下妻は先頭に立って歩き出す。正面から見て職員室の右端にある受付に向かっていた。

受付と職員室の本体はパネルで区切られている。その隙間から下妻は受付スペースに入った。人目につくせいか、少し雑然としている職員室とは違い、きっちりと整頓がされていた。
「すいません、立石さんおられます？」
「下妻先生、どうされました」
「転入生の生徒手帳を作らないといけないんで」
立石と呼ばれた男性事務員の一人が立ち上がり、下妻に話しかける。
簡潔に用件を述べると、立石はてきぱきと印画紙をコードに繋がれた奇妙な機械の開口部に差し込む。その機械は小さなプリンターの

上に上向けて双眼鏡のようなものが取り付けられていた。それは虹彩認証の装置だった。生体認証の一つで、非常に高い精度を誇るものだ。

「用意できましたよ。転入生さん、来てください」

立石が雪華達を呼び出す。おずおずと機械の近くまで二人は近づく。

「目をできるだけ見開いて、レンズを見てください」

立石の指示の通りに、雪華はその紅い瞳をレンズに向けた。

何故虹彩認証が必要なのか――――それは異能者が持つ「特権」を規制するためだ。
異能者は個人の感情とは無関係に、絶大なまでの破壊力を魔術は付与する。それこそ、一般人では相手にならないほどに。

この世界では拳銃や散弾銃、狩猟用ライフル等の所持は簡単に認められる。しかし、異能者に対してはフルオート火器の所持が認められていた。
そして魔術学校で異能者を繋ぎ、少ない点で管理した上でその周囲に魔術関連の企業や支部、さらに国防軍や警察の異能者部隊を置いている。悪く言えば、異能者を隔離しているのだ。
仮に異能者の大量殺人犯が普通の都市で無差別殺人に及ぼうものなら、甚大な犠牲者を出すだろう。現に、歴史の中では一つの町を自分もろとも焼き尽くして数千人単位の死者を出した事例も存在している。
つまり、異能者は同じ無差別殺人でも一般人では不可能なぐらいの損害をもたらす悪魔のような存在だ。ならば、毒をもって毒を制そうという考えは当然の考えだったのかもしれない。

そして、今も続いている。そこまで考えたところで、下妻は思考を中断した。
「下妻先生、終わりましたよ。これ、認証のスペアです」
「ありがとうございます、立石さん」
虹彩認証のスペアを受け取る。スペアは学校の金庫にクラス毎に保管し、手帳の更新時に古いスペアを生徒から回収したものと一緒に

焼却する決まりになっている。下手をすると生徒の一生に関わりかねない個人情報だからだ。
二人が手帳に名前、住所等の記入を済ませるのを見計らって、下妻は口を開いた。
「手帳をなくしたりすることがないように。なくしたら何もできないからな」
少女達が頷く。その時、紫苑が顔を覗かせた。楓香もようやく解放されたらしく、赤く擦れた喉元をしきりにさすっている。
「下妻先生っ、終わった？」
「あぁ。これからどうするんだ？」
「もちろん、シュミレーション室に」
「気が早いな」
紫苑はもうすでに、雪華の手をぐいぐいと引っ張っている。口ではそう言いつつも、下妻は興味があった。

あの銀髪の少女が見せた、鋭く苛烈で、それでいて一途な視線。あれは、守るべきものがなければ作れない視線だ。
さあ、君の実力を見せてくれ。俺が全力で、君の望みが果たせるよう努力する。

シュミレーション室は普通教室二つ分ぐらいの広さの部屋に、真っ黒なプラスチックで覆われたシュミレーション装置が等間隔に並んでいる。それだけ見れば殺風景極まりないが、普通教室の黒板の位置にある大きなホワイトボードが、それを打ち消している。そこは一部を除いて大量のプリントやメモが貼り付けられていた。

授業に対応するため、ホワイトボードの中央に面した部分にはシュミレーション装置は置かれていない。そこには二十人ほどの生徒達が集まっていた。全員が下妻の担当するクラスの生徒だ。その中で、舞は髪止めをいじって呟いていた。
「集まり悪いなぁ……」
舞は職員室の一件があったあと、雪華達がここにくることを想定して、あらかじめ携帯メールでクラス全員に「転校生の歓迎」を呼び掛けていた。
集まった人数は舞の想定よりも少なかったが、はたして予期した意図は達成された。予想だにしなかった事態に雪華と怜は戸惑い、残りの三人は舞の行動に呆れていた。そのせいか、二人の自己紹介は緊張して取り留めのないものになってしまったが、それを気にとめる人間はいなかった。

ここで気にすることは、戦いだった。ざわざわと周りが賑やかになる中、舞は雪華に近づいて話しかける。
「はじめまして、私は宮路舞。お相手、お願いできますか？」

硝煙と魔法の異世界　2—6

その舞の言葉に、雪華は頷く。

心の底から、戦ってみたいと思った。自分の中に眠る力は、怜を守るのに足りるのか？

　あの時のように、怜に守られてばかりの無力な自分ではないと、確かめたい。

　常夜灯があるだけのシュミレーション装置の中の椅子に座る。中はあまり広くはなく、内壁と一体化して取り付けられた机のうっすら光る部分に、雪華は生徒手帳を押し当てた。ロックが解除され、机の上にあるヘルメットを手にした。炭素繊維を主体としたヘルメットは軽く、雪華はゆっくりとそれを被る。常夜灯が消え、意識が少しずつ身体から遊離していく。身体が起きているのに夢を見ているような、不思議な感覚に包まれる。雪華はゆっくりと目を閉じた。

　選ばれた戦場は市街地。視界が制限され、下手をすると何もしないうちから倒される恐れすらあるシビアな世界。両脇をビルに囲まれた、二車線の道路の真ん中に雪華は立っていた。

　雪華は辺りに気を配りながら武装の確認をする。得物は大振りのダガーが一本、左の太股に鞘ごと括りつけられてその出番を伺っていた。抜けば両刃（もろは）のそれは細く鋭く、刺突向けに作られたことを示唆している。ここに来るまで、記憶の中ではナイフなんて触ったことすらなかった。だけど、身体が覚えていた。

静かに一人、佇立する。そして唐突に雪華は振り返ると、そこを薙ぐ。

「っ！？」

微かな手応えを感じとって、雪華は笑った。風で乱れた銀髪が煌めき、鱗粉を散らせながら舞う白い蝶を連想させる。いきなり攻撃されて驚きながらも、舞はナイフを構えて距離をとり、冷静に攻撃術式を展開する。

「凍てつけ、《アイシクルランス》」

空気中の水蒸気が昇華するほどの冷気とともに群青の槍が形成され、飛翔していく。それに対応するかのように雪華は背中から純白の翼を展開し、左翼を楯にした。槍は翼を貫通することなく砕け散り、ガラスのような淡い青の破片と化した。

彼我の距離は三メートル少し。雪華は飛ぶように大きく踏み込み、ダガーの切っ先をまっすぐ突く。金属の軋む乾いた音が響き、舞のナイフがあらぬ彼方へ飛んでいった。

もう一度、胸を狙って突く。舞は右腕を掴んで腕の動きを封じたが、眼前の出来事に対応するのに精一杯な舞に、足元の警戒はできなかった。それをみすみす見逃す訳もなく、雪華は舞の足を払う。

「きゃっ」

状況とあまり似つかわない舞の悲鳴と一緒に、物理法則に従って倒れ込む二人。体勢は上に乗っている雪華が優位で、舞は必死に抵抗するが体格に劣るせいで動くに動けない。

ここまでの至近距離になると、術式を展開しての戦闘はできなくなる。近すぎて十分な威力が出ないためだ。もがくだけで抵抗手段のない舞にのしかかる雪華の姿は、まるで生贄を喰らおうとする天使か悪魔の姿を思わせる。

最も、見た目ほど雪華が有利な訳でもない。四肢に魔力を通して必死の抵抗をする舞を押さえ込んではいるが、少しでも気を抜けば逃げられてしまうだろう。

「仕方ないか……」
雪華は誰に言うとでもなく呟く。
「あとで、怜が妬いちゃうかな？」
雪華は顔を舞の唇に寄せる。その真意を知ってか知らずか、舞は身体を震わせる。抵抗すら忘れ、怯えた子猫のような目で見上げる彼女に、雪華は囁いた。
「大丈夫、痛くはしないから」

最初、だけね。

そう言うと、嫌がる舞に無理矢理口づける。雪華の思うがままに舞の中を壊して蹂躙した。早くも焦点の合わない目で雪華を見る舞。その潤んだ瞳に、雪華は背筋が震えるほどの背徳感を感じた。

私は、なんていけないことをしているんだろう。ほとんど他人のような女の子のことを、楽しんでしまっている。
だけど、止まりそうになかった。

どれくらいの時間が経ったか、雪華にはっきりしたことは分からなかった。とにかく動きが無くなったのを確認して、雪華は唇を離した。これ以上しなくても、舞は動くことすら不可能だろうし、雪華にしてもこれ以上手籠めにするのはあまりにかわいそうだった。

道路に脱力して横たわる舞の姿は、魂を抜かれた、と表現してもおかしくない有様だった。最も、実際に魂を抜かれた訳ではない。粘膜接触で雪華に強制的に押し込まれた魔力の吸収が出来ていないのだ。例えるなら、一気にご飯を突っ込むと飲み込むのに時間がかかるのと同じだ。その間は認識が不可能なため、魔法戦闘能力を一時的に無力化できる。

また、舞は今の状況を理解できずに動けなかった。そうした要因が重なり、舞がただ屠殺されるのを待つだけの状況を作り出した。

舞の、綺麗な桜色をした唇の端から唾液が垂れているのを舐めとってやると、雪華は立ち上がって艶然と微笑んだ。目の前の少女は、まだ求め足りなさそうに見えた。

「続きは、まだ後でね？」

そう言って、雪華はダガーを舞の胸に突き刺した。

あまりに想定外のパターンだった。魔力の吸収が終わらない限りは魔力の認識ができないのは紫苑とて知っていたが、戦闘で使用するなどとは思いもよらなかった。

ごとん、とシュミレーション装置の分厚いドアが開き、銀の髪を額に零しながら雪華が出てくる。大抵の生徒は空気を読んで、見た目は普通に過ごしていた。最も、そういったことに免疫のない者は楓香のように真っ赤になっているが。

「怜、妬いちゃった？」

その本人は、なんら気にした風もなく怜に笑いかける。怜は何も言わずに雪華を抱きしめた。なすがままに身を委ね、顔を胸に埋めているその姿が、舞には少しショックだったらしい。

舞は雪華を見た後、顔を俯かせたまま脱兎の如く走り去ってしま

った。少し思うところのあった雪華は、怜に囁いてから後を追った。
「雪華ちゃん？」
「紫苑ちゃん、雪華から伝言だけど、お昼食べるところ決めといてって」

　少しでも離れなきゃ……舞はその一心で、シュミレーション室から飛び出し、近くのトイレの個室に駆け込んだ。
　とにかく身体が熱っぽかった。これほどまでにシュミレーションのフィードバックが恨めしく思うことは、後にも先にもないだろう。実戦にシュミレーションの結果を応用しやすいように設定された機能だが、それが今は裏目に出ている。
　シュミレーションの中で見た、雪華の妖艶な笑み。頭がスパークして何も考えられなくなりそうなほどの濃厚なキス。舞には、あまりに刺激が強すぎた。
　それを現実にされたら、何かが壊れてしまいそうで舞は恐怖を覚えていた。学校に不案内な雪華なら、きっとここには来ないと踏んでいた。
　だけど、そんな楽観的な考えはすぐに吹き飛んだ。今、一番舞が恐れている人物が、目の前であの笑みを湛えていた。
「いゃ……」
　声にならない声で抗議するが、それを無視して雪華は舞の首筋に唇を寄せる。そして、悪魔の言の葉を紡いだ。
「宮路さんが、そんなこと気にしなくていいの。満足するまで、してあげるよ？」
　そう言われて、舞の感情の奔流は理性の貧弱な土盛りを突き壊して溢れ出す。気付けば、獣のように雪華を貪っていた。

　水音が止んだ。舞が満足してくれたと判断し、雪華は唇を離した。

「これでいい？」
表面的には冷静な声音を保ってはいるが、雪華も頬を赤く染めている。ぎこちなくはあったものも、一途な思いはしっかりと伝わった。
「ごめんなさい……」
「可愛かったよ。どうして宮路さんが謝るの？」
「私、西川さんのこと何も知らないのに、こんな、こと、しちゃった……」
その言葉に、雪華はゆっくりと微笑んでみせる。
「気にしないで。私のことが知りたいのなら、これからいくらでもできるんだから。宮路さんが欲しいなら、ほんの少し順序がずれても構わないよ？
さ、お昼食べに行かない？　怜達が待ってる」
そう言って、雪華は舞の手を引く。しかし、舞は動こうとしない。
「……待って」
「どうしたの、宮路さん」
「私のこと、舞って呼んで……」
それを聞くと、雪華は得心したように頷いて言った。
「行こっ、舞ちゃん」
舞の前に現れた悪魔は、ひどく優しくて強い人だった。舞は雪華の手を、ぎゅっと握りしめた。

硝煙と魔法の異世界　２―８

協議の結果、昼食は学校近くのレストランに行くことになった。春休みのため、食堂は営業していないらしい。雪華と怜、紫苑、楓香、それに舞を加えた五人は連れだって青葉の町を歩いていた。

魔法学校の学生や営外居住を許可された国防軍の将兵のニーズに応えるため、五、六階建てまでの比較的小規模で家賃の安い集合住宅が立ち並ぶ中、その狭間に個人経営のこじんまりとした商店や飲食店が入っている、青葉独特の町並みだった。最も、少し海側に行けば大規模な商業施設が入っている。

青葉の町は、京都南部から大阪湾に流れ込む三水川（さみず）とその支流の合流点にある。それゆえ、昔から青葉は交通の要衝で、人口もそれなりに多い。背後は山脈が通り、航空写真を撮ればいびつに曲がった三角形になっている。

大阪湾から青葉の中心部までは約十五キロほど内陸にあり、雪華達が「死ぬ」前にいた世界での、大阪市と東大阪市の市境に当たる。

途中、銀行で当座必要なお金を降ろして、お目当てのレストランに着いた。小さくはあるが、アットホームで落ち着いた雰囲気を醸し出していた。きっと常連客も多いのだろう、お昼から少し外れた時間だったが、客はいくつかのボックスとカウンターの七割ほどを埋めている。ドアを開けると、恰幅のいい女性が出迎えてくれた。

紫苑や楓香、舞とこの店の女将さんは面識があるのか、親しげに喋っている。注文を終え、雪華は何か言い知れぬ疲れを感じて頭を怜の胸にもたれ掛けさせた。

「雪華？」

「……少し、疲れた」

「そっか」

怜の心音を聞いていると、不思議と安心できた。母親に抱かれているような暖かさに包まれて、雪華はうたた寝を始める。髪を引っ張られる感覚で、怜が髪を指で弄んでいると気づく。

「怜……」

不快ではない。むしろ、心地好いものだった。永久にこの時間が続けばいいと思いながら、雪華はまどろみの中に落ちていく。

しっかりと怜の服を掴みながら。

「はい、おまちどおさま。持って来ましたよ」

女将さんが料理を運んで来てくれた時、怜は自分の胸で気持ち良さそうに眠っている雪華を起こすのを少しためらった。それでも料理が冷めてしまうともったいないので、割れ物でも扱うかのように雪華の身体を揺さぶった。

「雪華、起きて」

「……怜？」

「ご飯、食べよ？」

こくりと頷いて、雪華はフォークを手に取る。そのまま目の前のグラタンにフォークを突き刺して口に運ぼうとするが、出来立てのそれを冷まさずに食べることはとうてい不可能な芸当だ。すぐに取り皿に取る羽目になる。その微笑ましい様子を、紫苑達は見守っていた。

「少し、うらやましいかな」

楓香がハンバーグを咀嚼しながら呟いた一言は、あたふたとしている二人には届かなかった。しかし、その言葉はその場にいた少女達の思いを代弁していた。

昼食は和やかに進んでいった。最も、散々に話のネタにされた挙げ句、雪華や怜に爆笑された舞はそうではなかったようだが。そんなホラ話を終えると、自然と話は雪華と怜のことになる。

「ぶっちゃけさ、今すぐに学用品を買う必要はないけだろうけど、

服と靴ぐらいはいるしね……。という次第で、これから買い物に行きましょう」
そう、今二人が着ている衣服や靴は全て紫苑と楓香からの借り物だ。いくら好意からとはいえ、やはり申し訳なさがこみ上げてくる。
「異議なーしっ！　舞ちゃんはどうするの？」
楓香もそれに同調し、舞にこのあとどうするかを問う。
「ごめん、今日は用事があって行けないから……」
「そっか。じゃあまたねっ」
「うん」
一同が立ち上がり、紫苑が伝票を取った。最も、それなりの金額なので紫苑が一人で払うのはかなりつらい。この場合、割り勘にするのが、暗黙の了解になっている。

舞と別れたあと、四人は学校と反対側に向かって歩いていた。そこは昔から商業の盛んなところで、大抵のものなら手に入ると言われるほどだ。
　雪華は大規模な商業施設内に入っている衣料品店の試着室の中で、笑うに笑えない状況に陥っていた。
「怜……疲れた」
流し目を使って、まだ他の服を着せようとする怜に懇願するが、無言のまま怜はいっこうに止める気配を見せない。紫苑と楓香は店員と一緒に少し離れた所で談笑しているらしく、とても助けてはくれないだろう。というか、こんな恥ずかしいところを見られたくはない。
　ふと、怜の方を見る。怜は試着室の床に膝をついて、一心不乱にボタンを外していた。呼びかけても、怜は反応を示さない。
　わかりやすいな、と思う。雪華は怜の頭をかき抱いた。反射的に離れようとするのを押し止め、こちらを見上げる怜と目が合う。
　いつもこうやって抱きしめるときは、背の関係から雪華がいつも見上げていた。だから、怜が雪華を見上げる構図になるのは新鮮だった。視点の差、たったそれだけなのに、そこから見た怜は儚げに見える。
「怜の服も、選んであげたいな」
とたんに頬を赤く染める怜が可愛くて、雪華は怜の唇にキスを落とした。

　女の子の買い物はとかく長くなりやすい。この買い物もその類に漏れず、終わる頃には日が傾きかけていた。手に紙袋を持ち、何だかんだとたわいもないことを喋りながら衣料品店を後にしたとき、

悲鳴じみた泣き声を雪華は聞いた。
「泣き声が、しなかった？」
「……うん」
「したね」
「行ってみる？」
何気ない紫苑の一言。何もなければそれでよし、万一荒事になっても対応できるという自信の現れだ。怜と紫苑が前衛に立ち、そのあとを雪華と楓香が追う。ちょうど夕暮れ時で混雑した通路を縫うように走っていくと、唐突に空間が開けた。
もう既に時間外となってしまい、誰も利用者のいないＡＴＭの隣に併設されたトイレ。そこから何人かの男性の怒声と僅かに幼い少女の泣き声がしていた。面倒な荷物はカゴに入れてひとまとめにし、近くのロッカーに放り込んだ。紫苑はそれを確認して、泣き声が漏れ聞こえる男子トイレに踏み込む。
「何してんのよっ！」
その怒鳴り声に、少女を襲っていた男達は一瞬怯んだようだが、相手が少女だと知って馬鹿にしたように言い返す。
「はん！　女が男子トイレに入ってくるんじゃねえよ」
「じゃあそこの可愛らしい女の子は男なの？」
一気に男の顔が赤くなる。
「うっせえ、こんな化け物なんざ焼こうが煮ようがこっちの勝手じゃねえか」
化け物。男は捕らえている少女をそう表現した。見れば、少女の肩には蝶を思わせる小さな翼がついている。
異能者という存在が過激派集団から差別されることがあるのは知っている。だが、こんないたいけな少女を捕らえて集団で暴行を加えようとするなど言語道断だ。紫苑は極力冷静さを保ちながら言い放つ。
「その子は人間よ。早く離しなさいよ」
「ちっ、見つかったんなら仕方ねぇな。ほらよっ！」

怜がその少女を回収するため、紫苑の前に出る。そのために付近の警戒を怠り、その近くのドアが開くのに気づかなかった。
紫苑が気づいた時には、怜はトイレの個人から出てきた別の男に少女ごとしたたかに腰を蹴られ、床に這いつくばってしまった。
「怜っ！」
「大丈夫？」
雪華と楓香が怜に駆け寄る。男達は数を頼んでいるのか、下品に笑って近づく。
「はっ、慣れねぇことするからそうなんだよ。まっ、今からたっぷりと身体に刻んでやるさ」
だが、彼らの余裕も氷の結晶が足元で砕ける音がするまでだった。
紫苑もぎょっとして雪華を見る。その吐息からは、形容し難いほどの魔力が溢れ出し、この空間を満たしていた。そして、紫苑には雪華が呟いた言葉を明確に聞きとった。
「……許さない」

硝煙と魔法の異世界　２―１０

周りの空気が、文字通り凍りついた。雪華の怒りが引き金となって、体内の魔力を空気中の魔力と感応させたのだ。その結果、マイナス十度近い気温の低下で水分が昇華、いわゆるダイヤモンドダストが発生した。

急激に低下した気温と尋常ではない怒りと魔力のオーラ。雪華の唇から吐き出される息は白く輝いている。可視化できるほどにまで凝集された魔力の放つ、独特の光だ。息をするのさえ苦痛な状況で、男達の士気は急速に落ちていく。既に立つのがやっとの彼らに、雪華は慈悲のかけらも与えようとしなかった。

「束縛せよ、《アイスバインド》」

殺すのはまずいと思ったか、それとも死に勝る苦痛を与えようとしたのかわからないが、雪華は拘束術式を展開した。

周りの魔力が雪華に感応しているせいで、術式の威力は桁違いに高かった。細い氷の鎖が、何十となく男達に絡み付く。その鎖は布地を侵し、皮膚を裂いた。通常なら起こり得ない現象だ。

いっそ一思いに殺した方が楽かもしれないなと思いつつ、紫苑はそれを見る。いくら強烈なものであっても、拘束術式で人が死んだ事例はない。本当に危なくなれば、自分が止めればいいのだから。

その極寒の地獄は、警備員が駆け付けてくるまでの約五分間続いた。こちらに向かってくる複数の足音を聞いて、紫苑は雪華の肩を叩く。おしまいだよ、そんな意味を込めていた。

それはきちんと伝わったらしい。吐息がただの白いものになったのを確認する。魔力の感応を絶ったのだ。最も、冷凍庫並に下がった気温は当分戻らないが。肩を震わせながらも怪我の有無を問う警備員に首を横に振って、紫苑は威力を限りなく抑えた攻撃術式を展

開する。
「焼き尽くせ、《ファイアアロー》」
小さな火の矢が放たれ、外部から拘束術式を破る。地獄から解き放たれた男達は気の緩みからか、次々と気絶した。このままでは邪魔になると判断して、雪華に外へ出るよう促す。
外に出て、しきりに蹴られた腰をさすっている怜や楓香と合流した。暴行を受けかけていた少女を親に引き渡し、このことでまた後日呼び出しがあることを楓香は伝えてくれた。それだけ聞けば今はもう充分だった。挨拶もそこそこに家に帰り、疲れのあまり夕食を食べたあと、怜と楓香は前後不覚に眠り込んでしまった。

紫苑は夕食の後、紬のいる一階に降りていた。工事のあらましを聞いて必要な書類にサインした後、だらだらと駄弁る紬を適当にいなして部屋に戻った。
「紫苑ちゃん、シャワー借りるね」
「いいよ」
二人が寝ているので、風呂場と更衣室、台所以外に電気はつけていない。疲れてはいるが、妙に目が冴えてしまっていた。紫苑は冷蔵庫からホワイトキュラソーの瓶を取り出す。甘ったるいキュラソーでなくとも酒はあるが、寝酒に飲用するならアルコール度数の高いものが好ましい。
ぐちゃぐちゃと頭の中で駆け巡る思考を、断とうとして染みていくアルコールが心地好い。化け物だの悪魔だのとほざかれても、所詮は人間なのだ。理性がある限り、鬼にはなれない。
グラスを何度か傾けていると、風呂場から雪華が出てきた。裸体にバスローブを羽織っただけの格好で現れた彼女は、ふらふらと紫苑のところにやってくる。頬にはうっすらとではあるが涙のあとが確認できた。
「どうしたの、雪華ちゃん。とりあえず座りなよ」

雪華は頷きはしたが、そのまま紫苑と相対するようにもたれかかる。それらの仕草一つ一つが、同性の紫苑から見てもぞっとするほど美しい。
「……怖いの。あの時、ショック死寸前だったたって聞いて、このまま本当に……」
人を殺めてしまうかもしれない。その告白に、紫苑は笑いかけた。
「大丈夫。もしあなたが間違った判断をしたのなら、私は全力でそれを止めてあげるから」
「ありがとう……」
雪華は紫苑の胸に顔を埋めた。気を落ち着かせるために、雪華の艶やかな銀髪を何度か梳く。
「夜も遅いね。もう眠りましょう」
話している間に酔いが回ったらしく、紫苑は眠気を覚えていた。そう言って、二人はもつれあうように眠りについた。

凄まじい爆音と騒がしい話し声が夜を引き裂く。吐き捨てられたガムはアスファルトを傷めつけ、夜の安寧を破壊する若者達がたむろしていた。近くのコンビニで調達したらしきジャンクフードの包装が無惨に打ち捨てられている。

スラム街を思わせる、荒れた路地裏。何か吐き気のようなものを感じて、少女は微かに眉を顰めた。僅かな夜の憩いにあやかるためには、ここを通る必要があった。彼女は鬱陶しげに髪をかきあげる。そうして、路地にブーツのソールを叩きつけた。

芝居じみた一幕。だが少女の挙動は、そのような違和感を消し去るほどに堂々としている。大きく響く足音に、それらが気づかぬ訳もない。たちまち少女は囲まれる。

「なぁそこのお嬢ちゃん、俺らと一緒に遊ばねぇか？」

意図するところが丸分かりの誘いに対し、少女は一言でそれを断った。

「……邪魔」

「来いっってんだよ！」

激昂したそれが手荒に突き出した腕を掴む。筋骨隆々とした腕を表情一つ変えることなく、まるで飴細工かのように曲げて見せた。

「うっ、つっ！」

苦痛の呻きを漏らしてそれは退く。だが包囲は解けそうにない。それどころかこちらに向けられる敵意は増すばかりだ。

彼女は小さくかぶりを振った。これだけの数を相手にするのは厄介だし分が悪い。不本意そうに、少女は術式を展開した。

「喰らい尽くせ、《シャドウスヴァート》」

複数攻撃に特化した攻撃術式。異能者ではないそれらに、闇に紛れ

て迫る飛翔体から逃れるのは不可能と言っていい。瞬く間に混乱が発生し、逃げ惑う。その様子を少女は一瞥すると、ゆっくりとした足取りで立ち去った。

ぱちり、とスイッチを入れる音が部屋に響く。少女は誰もいない空間に微笑んで言った。

「ただいま」

少女の表情は綻んだ花のように明るい。濡羽色の髪をたなびかせて、生活感のないリビングを通り過ぎる。

いつも彼女が自室として使っている部屋。そこには、真っ黒なドレスに身を包んだ少女がいた。見た目は部屋の主である少女よりも幼く、どちらかと言えば美しいと言うより可愛らしい。そう言った意味で、二人の少女は好対照をなしている。小さく愛らしい、桜色の唇が言葉を紡ぐ。

「お帰り、悧奈」

幼い少女は悧奈に駆け寄る。背伸びをしても自分の胸ぐらいにしかならないほど小さな少女を、悧奈は身を屈めて愛おしそうに抱きしめた。

「悧奈、見つかった？」

「ううん、まだ。だけど、嗅ぎ付けるのは早いんじゃないかな。また、少し暴れたから」

「悧奈は強いね。辛くはないの？」

「……ううん。公的には、私は断罪される立場よ？　人並みの幸せなんて、あの時に捨てたもの。

ねぇドール、貴女の声を聞いていると……とても、欲しくなってしまうのだけど？」

悧奈はドールの豊かな金髪を撫でながら、遠慮がちに尋ねる。

「もう……外に行く前にあげたのに」

「ごめんねドール、だけど可愛すぎるのも罪だよ？」

「誰もあげないなんて、言ってないのに……。どうせ悧奈にしかあげないんだから、満足するまで食べて？」
「……ありがとう、ドール」
悧奈はドールを抱えると、ベッドに横たえる。自らも横たわると、唇を近づけた。
「頂戴？」
「いいよ、あげる」
暖かく柔らかい、ドールの唇が触れる。悧奈の唇はすでに半開きで、ドールはそこから透明な液体を流し込む。
じょじょに力が抜けていくのが見てとれる。目の焦点は放散し、爪先が痙攣するが悧奈は背中に回した腕を離そうとしない。ドールは悧奈の中をめちゃくちゃに弄ぶ。
それが終わるのは、あまりに長いように悧奈は思えた。今、悧奈の身体は食物を必要としない。ドールが与える液体が悧奈を保つ唯一の物質だ。
「満足、してくれた？」
半ば忘我状態に陥った悧奈は、ただ頷くだけだった――

硝煙と魔法の異世界　3―2

人が越えてはいけない一線を越えて、俐奈は罪を犯した。この手に残る、肉を貫く感触。それは間違いなく罪を犯し命を奪った証だ。なのに、ドールは私を断罪しない。それどころか、まだあの少女達が生きていることを教えてくれた。

亡霊は、完全に葬らなければならない――――私の手で。

少女の声で雪華は目を覚ました。まだ身体が気怠く、疲れが完全には取れていないらしい。
「雪華ちゃん、もしかしてへたってる？」
「みたい……」
眼前の少女……紫苑は、労るように頬を撫でた。
「昨日のことで呼び出しがあってさ、私と楓香が行っとくからゆっくり寝てていいよ」
「ありがと。気をつけてね」
「うん。朝ごはんは置いてあるから、適当に食べてね。楓香、用意できた？」
「いつでも出れるよ」
慌ただしい朝の一幕。そんな中、雪華は陽光と布団が与えてくれる暖かさに身を委ねて、まどろんでいた。
　この夢とも現実ともつかない世界が、雪華は好きだ。ふわふわと世界から遊離しているような不思議な感覚。それをしばらく楽しん

でいると、唇に柔らかいものが触れた。驚く間もなく何かが口の中に侵入し、舌を絡めてくる。
今、こんなことができるのは怜だけだ。驚きから脱すると、息が続く限り雪華はキスを楽しむ。人体で最も鋭敏な部分であるそこに触れるだけというだけで、雪華は背筋に言い知れぬ快感が伝わるのを感じた。胸の中が疼き、もっと欲しいと身体がざわめく。
肺活量の限界に達し、唇が離れる。その名残のように一時、綺麗な銀糸が紡がれた。目の前にいる怜の首筋に、腕を回して引き寄せる。
「怜、もしかして妬いてたの？」
「そ、そんな、ちがっ」
しどろもどろになって否定しようとする怜の唇を瞬間的に塞ぐ。赤面して黙りこんだ怜の眼前で、雪華は片手で器用に自らのパジャマのボタンを外す。
楚々とした彼女の中に咲く花は、外面とはアンバランスなまでに妖艶だ。はだけた胸元からは、怜ですら酔ってしまいそうなほどの色香が漂っていた。
「怜、私を襲って？　今ね、ものすごく虐められたいの」
雪華は怜に甘えるように身体を擦り寄せる。
「本当に、めちゃくちゃにしちゃうよ？」
「して。怜のことしか考えられなくなるまで犯して」
それは違う、怜はそう思った。
私が貴女を捕らえた訳じゃない。貴女に囚われたのだ。
貴女の漂わせる甘い蜜の香りに溺れて墜ちて狂って壊れたのは私であって貴女じゃない。そう思っていた怜は、雪華に囁く。
「雪華が思ってる以上に、私は雪華に飢えてるよ」
「えっ……」
怜は雪華に覆いかぶさると、その唇を求める。雪華に抵抗するつもりはないのか、身を委ね、翼を広げて怜を包んだだけだった。
なんども怜はキスをしてくれた。中に溜まった怜の唾液を飲み込

むと、雪華は身体の芯を焦がすような熱さに襲われる。焼け付くように熱い胸や下腹部に当てられる手が心地好い。最も、すぐにそれはちりちりとあぶられるような熱さと快感に置換される。
早くこの熱さから逃れたい。こんな窮屈な場所から飛び立ってしまいたい。熱に浮されてぼうっとした意識の中で、切れ切れに怜の名を呼んで懇願する。
「いいよ……」
そう、言ってくれた直後。

雪華の中にあった箍（たが）が外れ、下腹部から大量の蜜が飛び散った。それを美味しそうに舐める怜の舌の感触が、ひどく蠱惑的だった。
人というのはこうなってしまうと弱い。満足するまで止まれなくなるのは、雪華とて例外ではなかった。また噴きだそうとする快楽に抗う術（すべ）はなく、雪華の下腹部は幾度も蜜を吐き出した。
全てが終わった時、二人はむせ返りそうなほどの甘い快楽の中で眠っていた。

　そのころ、紫苑達は昨日行った商業施設からほど近い警察署の真新しい取調べ室にいた。別に紫苑達が法に抵触した訳ではないので気楽なものだが、妙に慌ただしい。話が一区切りついたところで、紫苑は目の前の刑事に問い掛けた。
「刑事さん、なんだか今日は騒がしいですね」
人の良さそうな表情を浮かべた中年の刑事はその問いに苦笑して答えた。
「ああ、昨日の夜に不良が束になってのされててな。それの調査さ」
「それだけなら、珍しくないじゃん」
楓香が横槍を入れる。青葉は商業都市の常としてあまり治安が良くない。しかし、人口に対する異能者の割合が高いため、「たまたま」通りかかったり襲われたりして「やむなく」実力行使で倒す事例も多い。
「まあそれだけなら自業自得で済むさ。だけどな、そいつらが喰らった魔法が一般的な属性じゃない」
「それは……希少属性のことを言っているんですか？」
希少属性は六つの属性のうち、光と闇の属性のことだ。この二つは使い手が少なく、どちらも世界で数百人程度しかいない。
「ああ。青葉にその手の異能者はいないはずだが……。なんでも闇の属性だと聞きつけて、近衛の令嬢が来ると言って聞かないらしい」
「そうおかしなことでもないでしょうに」
「まあな。これで取調べはおしまいだ、お疲れさん」
だらだらと続いた世間話に、互いに苦笑を交わしあって席を立つ。紫苑は小さく一礼すると、同席していた婦人警官のあとについて取調べ室を出た。

その帰途の最終段階であるエレベーターの中で、楓香はため息をついた。らしくもなく疲れた表情を浮かべる楓香に、紫苑はどうしたのと問い掛ける。
「なんだか……厄介事の起きそうな予感がする」
「厄介事？」
そう言ったところで、エレベーターの上昇が止まり、扉が開く。エレベーターホールから部屋まではそう遠くない。いかにも気が進まなそうな楓香を引っ張って、部屋に入る。
「ただいまー」
紫苑は声を張り上げてみたものの、反応はない。台所の食卓に置かれた朝食は、朝置いたままになっている。
まだ眠っているのだろうか。そう思って、寝室の前のドアに立つ。
「雪華ちゃん、怜ちゃん、起きてる？」
返答はない。雪華や怜の眠りがそれなりに深いとは知っているが、時間はもうお昼を過ぎている。雪華達を起こすため、紫苑はドアを開けた。
その途端に二人を包む、熟れた果実のような甘い匂い。その中に横たわる少女達を、紫苑は一瞬直視出来なかった。その姿は見てはいけない、禁忌のベールに包まれているように映った。
甘く酔ってしまいそうな香りに満ち満ちたそこに、紫苑は足を踏み入れる。起こさないといけない、そんな義務感がこの花園の空気を吸うごとに、何か得体の知れない興味に置き換わっていく。
至近から見ると、翼を広げて怜を抱くように眠る雪華の姿は、熱帯の蓮の花のように見えた。その蓮は夕暮れに咲くと甲虫を誘い入れ、日が沈むと花弁を閉じる。甲虫は蜜と花粉に塗れながら花の花芯を一晩中喰らう。翌日に花弁は開き、腹を満たし蜜と花粉に犯された甲虫は次の花へと向かっていく。
どちらがどちらを喰らったのだろうか。あるいはお互いを貪り犯しあったのだろうか。下腹部はもとより、太ももや胸にまで飛び散った蜜が妖しく光る。その妖艶さからは、いつもの大人しく楚々と

した少女は想像もできない。
「雪華ちゃん」
試しに軽く身体を揺する。それだけで雪華は薄目を開けた。
「お帰りなさい、紫苑ちゃん。帰ってきてから私のこと、ずっと見てたでしょ」
「ごめん……」
弁明のしようもなくうなだれ、背後でドアが閉まるのにも紫苑は気づかない。
「ずるいよ……。来て、紫苑ちゃん」
雪華は手を伸ばし、紫苑の腕を掴んで引き寄せる。そのままベッドに引っ張りこまれ、紫苑は訳も分からず幼く淫靡な悪魔に捕まった。

「ずるいよ……」
「ゆ、ゆき……んっ」
病的なまでに真っ白な悪魔は肌を僅かに桜色にして、自らの名を言おうとした紫苑の唇を塞いだ。ほんの少しだけ舌を入れて完全に沈黙させると、紫苑のブラウスのボタンを一つ一つ外していく。
「ごめんね、疲れちゃったでしょ」
「……じ、自分で脱ぐからっ」
「ダメだよ。動かないで」
もう一度唇を塞ぐ。その間にボタンを全て外すと、ブラウスを床に投げ捨てる。スカートもフックを外して、足元に追いやった。下着と靴下だけにされた紫苑の身体を、雪華は慈しむように撫でる。
「可愛い下着……。とても似合ってる。肌だって、とても綺麗。紫苑ちゃん、本当にお人形みたい……」
赤面してしまいそうなほどの称賛の嵐に、顔を俯ける紫苑。それに構わず、雪華は水色のシンプルなブラジャーを下げ降ろした。雪華のそれより若干大きな胸に、ためらうことなく顔を埋める。
「ちょ、雪華ちゃん、それは……」
「あったかい……」
そう一言呟いて、「いけない？」と言わんばかりの視線を送る。自然と上目遣いになるそれを紫苑が断れるはずもなく、されるがままになっていた。
　それでも、雪華のスキンシップが嫌な訳ではない。紫苑は急激に眠気を覚えていた。無意識に雪華を抱きしめると、眠りに落ちた。

　紫苑が目覚めたときには日が傾きかけていた。午後から特に用事が無かったものの、主に紫苑にとってそのあとが大変だった。妬い

ているのか怜や楓香からジト目で睨まれたり、染みがついてしまったシーツを洗ったりと、結局かなり慌ただしい一日になってしまった。最も、その犯人の二人は全く懲りていなかったりするのは別の話になる。

そしてその大騒ぎから一週間ほどが経ち、始業式まであと数日になった。青葉の町では不良を標的にした暴力事件が次々に発生していたが、雪華達の周りは平穏そのものだった。この一週間、二日に一回ほどの割合で学校に行って教科書などの受け渡しや制服の採寸などをしていた。その間の事件らしい事件と言えば、学校で必要な鞄や学用品を買ったことと、紫苑がライフルの分解をしているさなかに、機関部で指を挟んで怪我をしてしまったことぐらいだ。
「痛っ……」
痛そうに顔をしかめて紫苑が絆創膏を張り替えていると、インターホンから来客を知らせるチャイムが鳴った。一拍置いて、「宅急便です」との若い男性の声。
「楓香ぁ、ちょっと出て」
「了解」
楓香が印鑑を持ってパタパタと玄関に走る。しばらくしてから、楓香はひらべったい板のような段ボール箱を二段重ねて持ってきた。
「中身何？」
「雪華ちゃんと怜ちゃんの制服だよ。靴も来てた」
じゃあ早速、ということで教科書を読んでいた雪華を引っ張って着せてみることになった。軍事教練がかなりの頻度である上に、国防軍との共同行動が期待される魔法学校だが、その特異性のため制服と体操服の別がないのが普通だ。そのため、見栄えの良さと機能性がうまく両立された制服になっている。
前合わせがダブルになった黒のブレザーは風よけの役割を果たしており、銃火器を扱うため肩の布地が厚く、防弾チョッキなどの着

用を考えて細身に出来ている。この下に黒地のブラウスを着る。ブレザーと同じ色のボトムズは普通男子がズボン、女子はプリーツスカートだが、体育の時は女子もズボンを履く。襟元には紫苑達の学年の学年色である深紅のリボンを蝶々結びにし、左胸のポケットに桜と青葉をあしらった校章がついている。

黒で統一されたその制服は、雪華の白い肌によく映えた。頬を赤く染めて、雪華は尋ねる。

「怜、どう……似合ってるかな」

「とても似合ってる。雪華」

名前を呼ぶところで、怜は声をひそめて囁いた。

「なあに、怜」

「あのね、このまま、襲っていい？」

「もう、怜ったら……。キスするだけなら、いいよ？」

雪華はそう言うと、怜に体重を預ける。照れ隠しのつもりなのか、少し乱暴に顎を持ち上げてキスをした。

間断なく怜の唾液が注がれる。どんな麻薬より甘美なソレを、雪華は躊躇うことなく飲みくだす。気づけば爪先立ちをしてまで、ソレを求めていた。

硝煙と魔法の異世界　3―5

桜が綻ぶ季節になっても、盆地である夜の京都の冷え込みはかなり厳しい。私は冷えてしまった爪先をさすりながら、一人物思いに耽っていた。

もし、光しかない世界があったら。
もし、闇しかない世界があったら。
そこに在るものは、きっと何もないだろう。
光と闇は互いがあって見えるもの。どちらかがなくなれば、残るものは虚無でしかない。
私は名も知らぬ貴女を求めている。逢いたい、話したい、その身体の温もりを感じたい。私は貴女と一緒になりたい。

そのことを父上に言ったら、最初は思い切り叱られた。だけど、私の意思が固いことを知った父上は折れてくれた。
許可は取ったが、まだ少女の行方が掴めない。はっきりとした接触があるまでは、動いても無駄足とは分かっている。
分かってはいても、抑えることは辛い。そのことを聞いてから、たまに屋敷をふらふらとさ迷うことが増えた。無意識に食いしばっていた歯を解くと、微かに血の鉄錆のような味がした。反射的に私は規定量より多く精神安定剤を取り出すと、その包装を破って錠剤を飲み込んだ。
ぎゅっ、と拳を握り締めて。
私を包む、この世界は平穏だ。今は、だけれど。例え私一人が壊

れたところで、時が経てばまたなだらかになるだろう。
　これは我が儘だ。とてつもなく自分勝手な我が儘だ。だけど自分が自分でなくなる前に、一目でいいから貴女に逢いたい。緊張の糸が切れてしまった私に、一人でいることなんて絶対無理だから――
――

　魔力を使ったあとは、総じて疲れを覚える。別にそこまで大量の魔力を放出した訳ではなく、多数の攻撃体を致命傷にならないよう制御するための気疲れに過ぎないが。それでも束になってかかってくる馬鹿共を倒すには複数攻撃のできる術式が一番効率がいいし、なにより殺すのは後の始末が厄介だ。悧奈は僅かな気怠さを覚えながらドールを抱き寄せる。
「ねぇドール……ご飯頂戴？」
「お疲れ様、悧奈。満足するまで飲んで」
魔力だけで生命を維持することは理論上はできる。しかし、それを実現するハードルは単純だが呆れるほどに高い。
　その条件は二つ。純粋な魔力が生物にとって飲み込める状態で存在していること。もう一つは、生物が必要な時にそれを体内に取り込めるほど大量に存在すること。この二つを両立させるのはほぼ不可能と言っていい芸当だ。
　それはドールとて変わらない。確かにドールが悧奈に飲ませる液体は、その量を考えれば驚嘆に値するほどの質を誇るものだが、完全な純粋には僅かに足りない。それでも一週間ぐらいならそれだけでもなんら支障はないが、それ以上になると肉体が末端から崩れ出してしまう。それゆえに悧奈はドールに言われて時々食物や水を摂るが、悧奈にとってそれは嗜好品といった感覚でしかない。今の悧

奈にとっての食事は、ドールが液体を口移しにくれる行為を示す。
「ありがと、ドール……」
「どういたしまして」
暖かく柔らかいものが唇に触れる。幾度となく繰り返した行為だが、未だに慣れる、ということを知らない。互いの唇を求め合い、出てきた舌を絡める。そうやって戯れていると、悧奈の命の糧である透明な液体がゆっくりと流し込まれていく。
「悧奈……」
つかの間の息継ぎ。息を荒げて囁くドールの弱々しい声が、悧奈の「食欲」をそそった。
「ドール……っ」
腕に力が篭る。僅かながら嗜虐の気がある悧奈はドールの小さな身体を押し潰すかのように覆いかぶさった。
こうなると、もはや食事どころではない。胸を圧迫されて空気を求めて喘ぎながらも、悧奈のキスに必死に応じている健気な姿には愛おしさすら覚える。そんな激しい行為を幾度も繰り返したあと、二人は力尽きたようにベッドに寝転んだ。
「り、悧奈っ、たら……。激し、すぎだ、よ」
「ごめんね、ドール。だけど、すごく可愛かったから。
あ、跡ついてる」
悧奈はドールの頬に顔を寄せると、流れた唾液を舐めとった。
「悧奈の、意地悪」
「もう、むくれないでよ……。私はドールと一緒に居たいよ。だから、私はドールが教えてくれた亡霊をもう一度、殺さないといけないの」
そう言って悧奈は微笑む。ドールに向けられたその笑みは、まるで聖母を思わせた。

硝煙と魔法の異世界　4―1

雪華にとっての朝はひどく静かだ。張り詰めているようで、馥郁とした豊かな香りに包まれている朝。周りでは、雪華の恋人や友人達が安らかな寝息を立てて眠っている。その憩いの時を壊さないよう、慎重に怜の腕を解いてベッドから抜け出す。

今日から学校が始まる。怜と一緒に登校できることに雪華の胸は高鳴っていた。日課のシャワーを浴びるため、雪華は一番奥にある寝室から風呂場に向かう。

手前の更衣室で衣服を脱ぐと、清々しい冷たさを含んだ空気が雪華の身体を包んだ。その中を舞うように雪華はタイルを踏むと、シャワーの温度調整を目一杯下限まで下げて栓を捻った。勢いよく水がほとばしる。空気の冷たさが一層増し、水流が雪華の身体を濡らす。身体から余計なものが抜けていく感覚を雪華は愉しんでいた。

しばらくの間その儀式じみた行為に耽っていると、ドアの開く音が聞こえた。その音を聞いて、雪華はシャワーの栓を止める。名残惜しかったが、その音で雪華は水浴びをやめることにしていた。身体の水分を拭い、バスローブを羽織って風呂場から出た。

身体の感覚が麻痺しているせいか、雪華は少しふらつきながら廊下に出た。

「おはよ、雪華」

「……おはよう、怜」

寝室から出てきた怜と挨拶を交わす。朝食は雪華を除いた三人が交代で作り、朝の早い雪華はそれの配膳などを手伝っている。今日は怜が当番で、少し早く起きていた。起きたばかりで寝ぼけてはいるが、それでも忘我していると言っていい状況の雪華を捕らえるのはたやすい。

「無防備すぎだよ、雪華」
腕の中に収まった柔らかく華奢な身体は、少しでも力を入れてしまえば折れてしまいそうだった。状況が掴めずにいる雪華の顔を引き寄せる。
「怜……？」
「いけないいじゃない、そんな格好で私の前に出てきたら。そんなに食べられちゃいたい？」
ようやく事に気づいて、雪華は怜の腕から逃れようとする。しかし、すでにしっかりと抱きしめられてしまっているため無駄に終わった。
「もう、我慢できない。全部、雪華のせいだから」
「っ、れ、れいっ」
それはまだ体勢の整っていない雪華にとって、あまりに強烈で。その雪のように白く冷たい肌で、怜の指と唇が荒れ狂う。白皙の皮膚に薄紅の印が刻まれ、垂れた黒髪が雪華の頬や首筋をくすぐる。
「私を誘う雪華が悪いの……。身体で、償って」
耳たぶを甘く噛んで囁くと、怜は唇を塞ぐようにキスを始めた。雪華がそれを受け入れるにはほど遠く、一方的に攻め立てられる。ほどなくすると、雪華の身体が痙攣を始める。
　雪華は一時的にではあるが呪縛されていた。支配権を怜に奪われ、ただ為すがままにされるだけの存在になっていた。それから解放された時、雪華は怜の腕の中で膝をついて、糸が切れたように身体をもたれさせていた。
「怜の、バカ……。首が、むずむずする」
「バカとでもなんとでも言って。我慢できなかったんだから。気になるなら見てみたい？　雪華の可愛いここ」
「怜の意地悪。虐めないで……」
怜の指先が首筋につけられたキスマークを嬲る。くすぐったそうに身をよじらせる雪華を抱きかかえて、更衣室に連れていく。洗面台に据え付けられている鏡の前に立たせ、湿り気を残した銀髪をかきあげた。

剥き出しになったうなじと首筋があらわになり、鏡に映る。その様子を見て、怜は満足げに微笑む。

「うん、とても綺麗に映えてる。雪華の肌、真っ白だから……」

「れ、怜、これっ……！」

「そうだよ。一度、してみたかったの」

信じられないと言わんばかりに身体を震わせる雪華。

「怜、私達、これから学校行くんだよ？」

「分かってる。思いっきり見せつけてあげよう？　雪華は私のものなんだから」

「嫌っ……！」

「そんなに恥ずかしいなら、隠してあげるよ？」

怜の差し出した助け舟に、雪華は縋るように頷いた。

「そっか。少し待っててね」
怜は雪華の唇に指で触れると、更衣室から出ていった。残された雪華はそんなささいな悪戯にも気づかず、床に尻餅をついて座りこんだ。
熱が身体の内奥を焦がす。その熱は身体の中で疼き、雪華の理性を食らう。フローリングの床はまだ冷たく、火照った身体を慰めはしてくれるが、到底落ち着きそうにはない。
怜に抱きしめてもらえば収まるのだろうか。悶々として過ごすうちに首筋に感じた、冷たい感触。それに応じて顔を上げると、怜が雪華の身体を抱いていた。
「お待たせ、雪華」
「怜の、馬鹿ぁっ……」
そう罵りながらも、雪華は怜にしがみついて離れようとしない。
「ごめんね、雪華がいじめたくなるぐらい可愛いから、つい。もうそろそろ時間だね、二人を起こしてあげて？」
まだ雪華は怜に何をされたか気づいていない。それが後々、雪華にとって業腹の結末をもたらすのだが。

紫苑にとっての朝は、雪華のそれとは少し異なる。大抵、特に雪華達と一緒になってからは、賑やかさが紫苑にとっての朝だった。
「紫苑ちゃん、朝だよ」
夢とも現ともしれない意識の外から差し延べられる、明瞭な声と冷たい感触。
「ん……、雪華ちゃん」
その優しく澄んだ声に紫苑は瞼を開く。母親の血を濃く引いた青い瞳が、目の前の雪華の姿を捉える。

「おはよう。……？」
目の前には少し憔悴はしているが、いつものように微笑みを湛えている。綺麗に整った首筋や肩から流れ落ちる銀の髪は濡れて、冷たく鈍い光沢を放っているのはいつも通りだ。
だが、その滑らかな首筋に巻き付いているモノは明らかに異質だった。明るい茶色の革ベルトが、雪華の首に付けられている。胸元の開けたバスローブと相まって、その姿はかなり煽情的な風景だ。
紫苑は頭から抜けきらない眠気を振り払いながら、雪華がなぜ首輪をしている理由を考えてみる。欧米や東南アジアでは迷子防止のために首輪を付けることはあるものも、中学生にもなって付ける酔狂な人間はまずいないだろう。では、どうしてこんなモノが……。
「紫苑ちゃん？」
結局、解答の見当たらない疑問に紫苑の脳はフリーズを起こしたらしい。目を開けたまま起きようとしない紫苑を見かねたのか、雪華は顔を寄せる。
ずるい、と思った。いつもは儚げとも言えるぐらい楚々としているくせに、気づけばいつも少女の色香に捕われて逃げられないようになってしまう。さらにそれを自覚していないあたり、さらにタチが悪い。そうならないためには、早く抜け出してしまうに限る。
これが休日なら、好奇心に身を任せてしまってもいいのにな、とは思いながらも紫苑は雪華の首筋に触れた。ぴくっ、と身体を震わせて硬直する雪華。そんな雪華を尻目に、紫苑は手探りで首輪を外す。
「紫苑ちゃん……？」
「これ、どうしたの？」
外した首輪を見せると、雪華は頬を赤く染めて俯いた。
「それ、……」
「雪華ちゃんの首についてたけど？」
「……っ、怜のバカぁ……！」
雪華は唐突に首輪を奪いとると、寝室から走り去る。

「あーあ、行っちゃった。結構似合ってたのに……。写メでも撮っとけばよかったかな。
楓香、起きて。朝だよ」
「んー、あとちょっと……」
一人寝ぼけて幸せそうに頬を緩めている楓香は、紫苑の左手を掴んでまどろんでいた。紫苑が左手を引っこ抜こうと腕に力を入れたとき、台所から空気を揺るがすような大声が聞こえ、一拍遅れてかなりの魔力が放出されたことを紫苑は感じとった。紫苑は攻撃術式が展開されたのではと内心冷や汗ものだったが、楓香は依然として寝ぼけたままだ。
「どうしたのー？」
これには少々紫苑とて苛立った。強引に腕を抜くと、楓香を抱き寄せる。耳の後ろに唇を寄せて、息を吹き掛けた。
「ひゃっ！　くすぐったいよぅ」
「おはよ、楓香」
さすがに目が覚めたらしく、じたばたともがきだす楓香。力を緩めて解放してやると、怒ったような顔つきで睨んできた。最も顔立ちがまだ幼いので、睨まれたところで全く怖くないが。
「もう少し普通に起こしてよ……」
「ごめん、ちょっとした出来心だから、ね？」

ご機嫌ななめの楓香を宥めすかして、紫苑は台所に向かった。攻撃術式で壁に大穴が空いていたり周辺の家具が木っ端みじんなどという最悪の事態は回避されていたが、室温が異常に低い。四月とは思えない寒さが、台所と一体化しているリビングを覆っていた。その中で何故か土下座している怜と、怜の髪を引っ張っている雪華がいた。

理由は簡単に見当がついた。首輪の一件で激昂した雪華が、魔力を感応させて気温を下げたのだろう。部屋の体積が割合大きく、ある程度の加減もあって過日のトイレほどの寒さではないのは僥倖というべきだった。

「っくしゅん！」

……そうであったとしても、室温は摂氏零度を切っている。パジャマ一枚で長時間居ては確実に風邪を引く環境だ。紫苑は少しずつ調整しながら自らの魔力を感応させ、気温を上げていく。一応エアコンもあるのだが、それを使わないのは紫苑が人工的な温風が嫌いなのと、自らの鍛練を兼ねていた。加減を間違えれば火傷させてしまう可能性がごく少しでもある以上、気は抜けなかった。

「お、おはよう……」

「おはよう、楓香ちゃん」

紫苑が無言で感応させているさなか、楓香がおずおずと雪華に挨拶する。ひれ伏している怜の髪を引っ張りながら、言葉を返す雪華の唇は笑っていたが、目が笑っていない。その形相におじけづいたのか、楓香は紫苑にしがみついて影に隠れた。

部屋に重い沈黙が流れる。それに耐え切れなくなったのか、楓香は「トイレに行ってくる」と言って部屋から出た。それを見計らったように、雪華は怜の顔を上げさせる。

「ねぇ怜……、どうしてあんなことしたのかな？」

その声音は普段からは想像出来ないぐらいに甘ったるく愛らしいが、置かれた状況を鑑みればそれは恐怖でしかない。髪を引っ張られている痛みも忘れて、怜はただガクガクと震える。
「私ね、とっても恥ずかしかったんだよ？」
「ごめんなさい出来心ですから許してくださいっ」
こうなると恥もへったくれもない。下手をすれば命が召されてしまうだろう。必死で保身に走る怜に、雪華が囁いた。
「もう意地悪しないなら、許してあげる」
「しないっ！　しないから許してっ！」
「よく言えたね、怜。ご褒美あげる」
ふっと髪を引っ張る力が緩み、口に何か柔らかく温かいものが押し込まれた。息が詰まり、呼吸が出来なくなる。もがいて抜けだそうにも頭が固定されているのか、抜けだせない。目を開けると、雪華の顔が見えた。雪華の甘えん坊め、と思いながら怜は身を委ねた。
何度も中を掻き回され、唾液が流れ込んでくる。溢れた唾液が頬を伝って落ちてゆく。深く温かい倦怠感とともに長いキスから解放されると、怜は力尽きたように雪華にしな垂れかかる。その頃には寒さも緩み、季節相応の気温になっていた。
「怜は、楽しんでくれた？」
「激しすぎ、だよ……」
その言葉に雪華はくすっ、と笑う。
「今度意地悪したら、怜が窒息するぐらいめちゃくちゃにしちゃうから」
そこに紫苑の合いの手が入る。
「二人とも朝からイチャイチャしてないで着替えてきなさい」
「ん、分かった」
ほんの少しむくれているようにも見える紫苑を尻目に、雪華と怜は連れだって着替えに向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9183r/

interlace fate

2011年11月7日21時10分発行